

7273

222
89

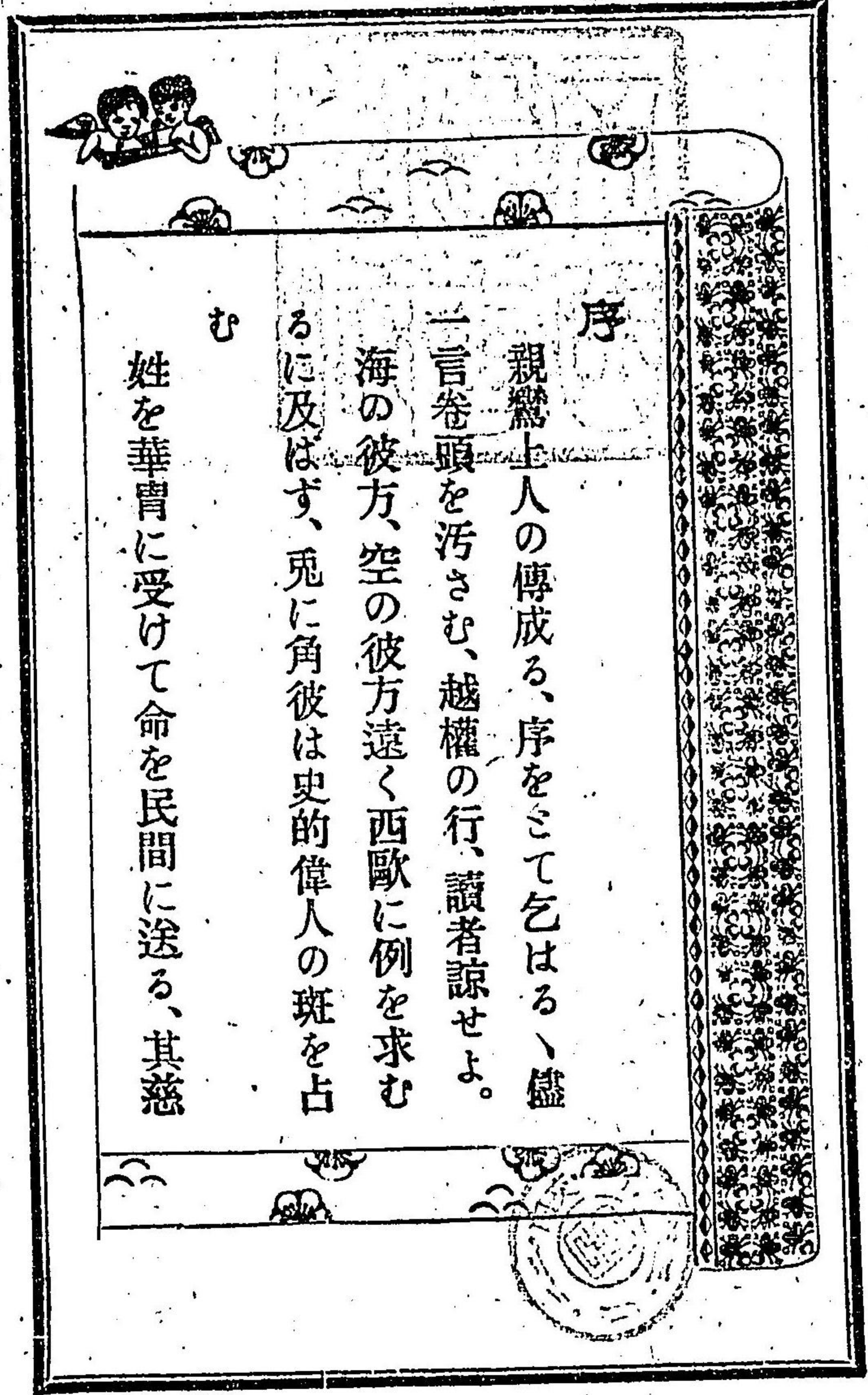
親鸞聖心御代記

田邊南鶴口演

浪上義三郎連記



東京三新堂發行

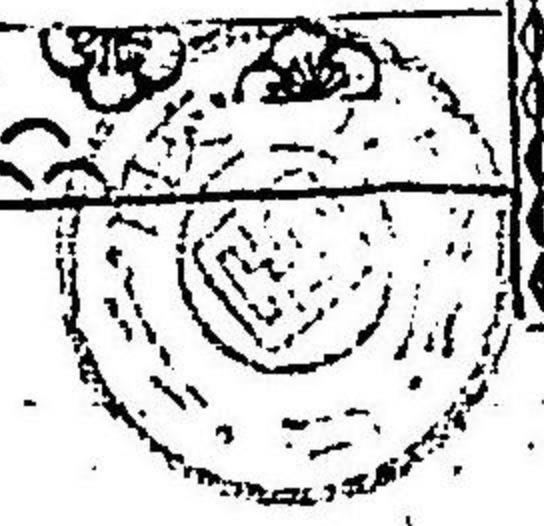


序

親鸞上人の傳成る、序をきて乞はる、儘
一言卷頭を汚さむ、越權の行、讀者諒せよ。

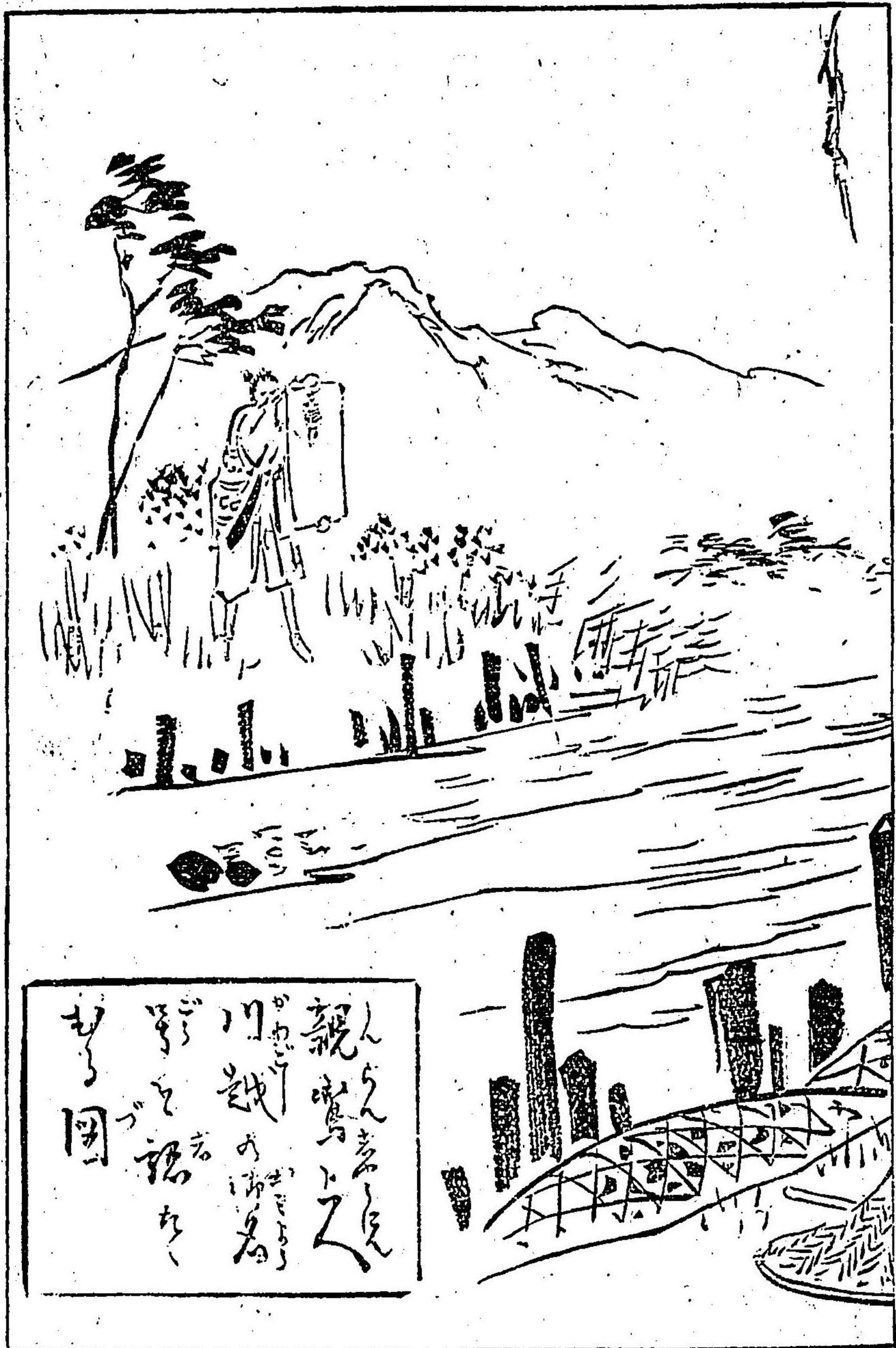
海の彼方、空の彼方遠く西歐に例を求む
るに及ばず、兎に角彼は史的偉人の斑を占

む
姓を華胄に受けて命を民間に送る、其慈



仁王尊代官
秋原正景
取押入敷
一 誦





438
954

親鸞聖人御一代記

今、回れ、好みに依て、親鸞聖人の御一代記を口演仕ります。御承知之通り、是は眞宗の開祖でございまして、大層御苦心を爲すつたお方でございます。其れに勉強家で弘法大師も勉強家であつたが親鸞聖人は一層の勉強家でございまして、只今に至つて門徒宗と稱へまして、大層此の御宗旨は全國に廣くゆき、涉つて居ります。同じ宗、旨でも、日蓮宗と來ると、恐ろしい陽氣で、横町の熊や八公が、團扇、太鼓を持って、堀の内へ參詣と來ると、中には赤い手拭を冠つた奇麗ナ



親鸞聖人御一代記

第 一 席

田邊南鶴口演
浪上義三郎速記

悲心溢れて衆生濟度の大願となり、其批判力逸して佛教改革の雷聲となる。

美はしき書や、濁に慣れたるもの茲に光明を得、趣味深き書や、閑になやむ者此に安慰を得、歎く者、訴ふる者、喜ぶ者、笑ふ者、來つて本書を讀めし、

さるるさるる

薰 寛 堂

記代一御人聖鸞親

姉エさんが着類の裾に泥を剋ね上げながら南無妙法蓮華經ド
ドコドンドコと太鼓を叩いて参詣をいたしますのはなかく色
氣のあるものでございませう。○ライ熊大層向ふにゆく新造は美
麗な女じゃアねエか何處の娘だエ。○横町の建具屋の菊坊だ
熊何才たらふ。○十七で二三日内に婿が來るとヨ。熊婿は何者
だ。○何んでも呉服屋の次男ばうで菊坊が仕事の稽古にゆく内
にい、仲になつたのだとヨ。熊畜生め……南無妙法蓮華經……
お祖師様を畜生呼はりをする夫れに仰向ひて大きな聲で怒鳴り
立てるから法華宗は稍ともすると犬の糞を踏み付ける然し陽氣
なれ宗旨でございませう門徒の方は門跡様へ参詣をすればといつ
て若ひ人は少なふございませう重に老爺さん老婆さんが孫の手を
ひきながら参ります。○夫れ危ないヨ其處は道が悪ひ夫れ
足元を氣を付けて南無阿彌陀佛夫れ。着物が引ずりませう下を

記代一御人聖鸞親

見てお歩行ヲヤ。此處に墓口が遺失て居た南無阿彌陀佛……
門徒の方は下を向ひて陰氣だから時々拾ひ物杯をする併し門跡
様のれ講刺りと來ると中々髮結床へ往つて髻を剃るとは違ひま
して價が高ふございませうズラリと並んで居る信徒の頭の上を珠
敷で撫て剃刀を取ると南無阿彌陀佛……ヘエ旦那宜しうござい
ます夫れは髮結床でソナことはいひはしません實に有難ひも
ので隨喜の涙にくれます其處で此の門徒宗ばかりは娘が死ふが
悴が死ふが親が死ふが更に歎きません娘も幸ひに阿彌陀様の處
へ引き取られましたとか悴も彌陀の淨土へ参りまして美やまし
ひことをございませう南無阿彌陀佛。實に生ある物として死ぬ
ことを喜こふものはございません然るに門徒宗は呆らめの宜い
ものでございませう死といふことを更に恐れません左れば織田
信長といふ天下有名の英雄が石山本願寺を攻めて彼處へ城を築

親鸞聖人御一代記

かふとした時に門徒の宗徒が立籠り何うしても信長はどの英雄
が攻めても落去なかつた是れ平常より早く死んで阿彌陀様のお
傍に往きたいといふ宗旨が心に染み渉つて居りますから強ひの
でございませすソコで佛の慈悲といふことは苦を抜て能く樂を興
へるといふことでございませす南無といふことは願ひます阿彌陀佛は無上
正眞道を得たことを阿彌陀佛といふ然らば此の本を御覽なされる
お方も口演べる南鶴も上もない眞の道を得て道徳堅固になつた
ならば即ち夫れが佛でございませす……コゝいふと大層南鶴が學
者の様であるが其の實は寺の僧から聞きた話しでございませす、偕て
余事は棄て置きまして請談に取りかゝりませすが抑も、眞宗の
開祖親鸞聖人の御系圖をたづねますと天神七代の始め天の御中
主尊より四十六代目の孫天の兒屋根の命より三十八代大職冠鏡
足公の玄孫で近衛の大將右大臣從一位内麻呂公六代の後亂宰相

四

親鸞聖人御一代記

有國公五代の孫皇太后宮の大進有範朝臣の子息でございませす中
々一息には之れは遣り切れません、君は清和天皇七代の孫鎮
守府將軍家義公の嫡男但馬守義近の娘でございませす御名を公光
女と申しませす源氏中興の大將朝頼郷と伊豫守義經とは親鸞聖人
は亦從弟でございませす實にお系圖に於ては類ひ稀なことでござ
いませす所謂暖簾がいとふので人々が多く歸依いたしたも最
ともでございませす弘法大師は紀州熊野の賤しき者の尊といふこ
とです又日蓮上人は大日本誌に安房の國の屠者の男としてある
否な書てありませす然らば之も暖簾が能くない夫れに日蓮は一番
終ひに出た坊さんで恐ろしひ活潑でございませす、玉の様に圓ひか
ある親鸞聖人は少しも角がございませせん玉の様に圓ひか力でろ
れに古今稀な慈悲深い人でありませした殊には手跡が美事と和歌
は古今の御銘人でございませす唐土の聖人賢人にたとへて見ると

五

親鸞聖人御一代記

日蓮上人に孟子の様に少し荒い處ろがある親鸞聖人は顔回の如
き圓るい桑やかなお方でございまして南鶴は日蓮様のことは非
常に調へまして佛臭くなく面白いお話しもございまして折
を見て出版をいたすことにいたしました今回は親鸞聖人の御傳
記でございまして此の方を早々片付けることにいたしました、倍
て御母上人皇八十代……高倉院の御宇承安三年壬辰五月二日
の夜御居間に於て頻りに御書見をしてあらせられました、深々
と更け渡る真夜中俄かに寐ひ氣を催ふして傍はらの脇にもた
れトロくどまどるむ夢の内不思議や西の方から金良の光り
輝やき渡り御母上の身体を廻ること三度にしてパツと口中に其
の光りが入りました大きに驚ろき西の方を見たまへば獨りの菩
薩立せ給ひまして一尺ばかりの五葉の松を一枝持ちそれを言
光女即ち親鸞聖人の御母上に與へて微妙なる御聲にて

親鸞聖人御一代記

我は之れ如意輪觀音なり汝不思議の子を産ん必らず之を以て
名とせよと松を與へて紫の雲に乗り西の方に飛び去りました
ツと驚ろくと仮寐の夢はさめました次の間に居た腰元兩手をつ
かへまして女御前様何かお夢でも御覽遊ばしたと見へて大層
うなされてお出でございしましたが如何なされましたか問はれ
て吉光女は笑顔をつくり吉イヤ夢の内には尊とき御佛に出逢ひ
此の通り松を一枝得たが不思議なことであると仰せられました
た腰元も奇異の思ひをして其の松を見ると線露がした、らん
ばかり併も五葉の松でございまして翌日に相成つて巳れの夫有範
朝臣に此の話しをいたしますと暫らく考へてお出でなすつた
が有範郷が稍あつて口を開き有珍らしき夢を見るものである
殊に夢の内松を得るとはいよく不思議千萬昔し管丞相は身
の上松を生じた夢を見て遂に藤原の時平の讒にかゝり筑紫

親鸞聖人御一代記

へ流罪に相成つたことがある、併し御身の見し夢は悦こびの印し
でがなあらふ併し不思議な小兒を産むとも出家として我が家は
繼がされんとはいはれました吉光女もうれより只何んもなく心持
常ならず早速醫師を呼んで見せますと之は御懐胎に相違ない
偲はと思召され御身を慎しむ目にもろくの不淨を見ず耳にも
ろくの不淨を聞き頻りに宜き上にも行なひを正しく爲れまし
た偲て昔しから英雄豪傑が出生をする時と聖人賢人杯が生れま
す時には多く前表がある様でございます、お釋伽様を宿した時に
おッ母さんの摩耶夫人の夢に金色に光りし冠を頂たひた天子様
が白い象に乗つて夫人の右の脇の下より這入つたと見てお釋伽
様を産んだといふ摩耶夫人も苦しむでございましたらふ馬に乗つ
た者が脇の下から這入つて來られては堪らない我が朝にて人皇
三十二代用明天皇の妃間人の皇女夢の内に金色の僧が突然現は

親鸞聖人御一代記

れて ○其の方の胎内を借りる乎 女委くしは穢れ不淨の凡俗
の身の上如何でか貴下の様な尊とされ方に身の内を仮することが
出來ませうとね斷はりを申し上げた時に彼の僧 ○イヤけがれ
の身は更に厭はん吾は人間界に生れて生きとしいけるものを濟
度なさんの考へであるといひながら口の内へ飛び込みました
何うも夢に出て來るものは皆んな乱暴で脇の下から這入つたり
口のの中へ飛び込んだりいたします、如何に家價が高くなつても人
間の身体を借りるのは強ひ話しです、借て此の尊とき御婦人が産
み落したのが聖徳太子でございます、近くは太閤秀吉の母亂が
日輪懐ころに入ると見て太閤様を産みました、是れ等は怪しひと
いへば怪しひ然し學者をして此の原因を考へさせたならば胎
度理由のあることに相違ございませぬ馬鹿くしひといふのは
所謂生學者で宇宙の廣大なることを知らんからでございます、今

親鸞聖人御一代記

より三十年前の人に大坂と江戸と話しをすることが出来るとい
つたらソナナ馬鹿くしひことがあるもんかと只一言に誹謗
したに違ひない處ろが世の中が進んで来て電話といふものが出
来て自由自在に百五十里離れた大坂と話しが出来す然らば夢
中に不思議なことがあつたといふのも今に分明に違ひない分
ないからソナナことばないといふ昔の話しでありませすが蟻が
敷邊集まつて飯つふを穴へ運んでゆくと蟻の王様が「汝達は
何も知るまいが此の世界に人間といふものがあつて其の飯つふ
を何万となく茶碗の中に入れてザク／＼喰べるものがあると話
しますと蟻が一同に失笑して○親方ソナナ大きな物が此の世界
にあつて堪るものかといつた例しがあります然らば原因を索ね
たら不思議なことではないのでございませう倍て吉光女が月日を
重ね懐胎をいたしてより十二月目で承安三年癸巳四月一日安々

十

親鸞聖人御一代記

と玉の如き若君を産み落しました即ち夢の告げに依つて幻名
を十八公庵と名付けました……能く此の身分の宜い人の子供に
は麻呂といふことがございませうが麻呂といふことは才といふこ
との反對でございませう才といふ字は和訓かどと讀せる彼人は
才があるかどがある麻呂は即ち丸であるから才に對する卑下
した詞ばでございませうそれを近頃船に丸を付ける朝日丸だとか
海運丸だとかいひますが考へると笑止な譯でございませう倍て
此の十八公麻呂といふのは十八公と書て松と讀せる字は理つめ
でございませうして百の足と書てひかでと讀せる千の足と書てげち
くとは未だ讀せない……實に此の若君の顔形ちの美しくしきこ
とは玉を延べたるが如く御目の内に光りがございまして凡人と
は見へませせん御父有範朝臣のお喜悅一と方ならず手の内の玉と
愛人しみ養育をいたしましたが並の子供と違ひまして生長の仕

十一

記代一御人聖鸞親

方が恐ろしく早い四月に生れて其の年の十一月にはソロソロ歩
行く此の調子でゆけば満三才で徴兵検査を受けなければならな
い然るに何ういふ譯でござますか御成長の速やかな割には何分
片言も申しません腫ではないかと思つて醫者に見せると左うい
ふ御病氣でもないといふ聊さか心安んじました却又折に觸れて
は早く物いへば宜いといふことを思ひます既に其の年も暮れて
至承安四年甲午の八月十五日月見の宴を催はしました御母上吉
光女を始め乳母腰元其の他家の奉公人どもを集めて庭に向ひた
廣間で御酒宵元來有範卿十八公麻呂を深く御寵愛でございます
から乳母の手より受け取りお膝の上に乗せ有「何うじや父が抱
ひて遣はしてよろこばしひか」といひつゝ頭を撫て思はず涙を流
しました斯くまで成長をして物語はん醫者は生れはき腫でつ
ないといふが氣がかりのことじやいはれる折しも東の山の端よ

記代一御人聖鸞親

り玉の如き満月さし登りまして御膝元を照しました時に若君此
の月に向つて小さいさき御手を合せ給ひ十八南無阿彌陀佛と
二々聲念佛を唱へました其の御聲の清らかなること恰かも大
人に異ならず御父母を始めとして並み居る人達之れはとばかり
に驚ろきました有範卿満面に笑を含み給ひ有「和子其方は今迄
何故に物語はん今日月見の宴で始めて彌陀の稱名を唱へたは悦
こばしきことである之れは何んと申すと盃を取つて出しました
時に十八夫れはお父上酒を呑むべき器でございます有「ウン能
く申した之れは何んじや十八夫れは長柄の銚子でございます
有「中空に昇る彼の光り居るものは何んじや十八月でございます
有「彼に居る者は何んじや十八乳母でございます有「余の傍に居
るものは十八母上でございます有「左様か頻りに又腫になつて
はならぬと心配の余りいろ／＼のをお尋ねなさる之は親子

記代一御人聖鸞親

の情でございませう昔し聖徳太子が御降誕の時二才の二月十五日の曉つきまで兩手を開きませんでした二月十五日の曉つきに東の方に向つて南無阿彌陀佛と稱名を稱へたことがある南鶴共の横町の伊勢屋は本年六十になりませんが生れた時から未だに握つて居る更に手を開きません倍て其後若君は少しも物をいふのに差支へなる又仮初の戯ひれにも經文を取り出し又は念珠を腕のりび南無阿彌陀佛と佛名を唱へます後世名をなす人は子供の内から違ふ中々東雲のストライキ去りとはつらねなんといふことはいはない斯くて承安五年に改元があつて安元元年となりました其の年が経つて翌二年となる若君が四才でございませう二月十五日の日暮方でございしました乳母が腰元共と話しをして居る間だに若君の姿たが見へなくなりました人々驚ろひて

記代一御人聖鸞親

りませぬ向ふではないか此方ではないかと彼方此方を尋ねて居るとコハ如何に庭の彼方にあつて南無阿彌陀佛といふ念佛を唱へる聲が聞かれます倍は若君彼れにならせられたかと一同庭に下り立て見ると小高き處ろに梅の木がございまして其の梅の木の下に土を練て佛僧を三昧造り東の方に向けてうれを置き西に向つて手を合せ南無阿彌陀佛とお念佛を唱へました乳母が之を見て

○マア若君何を遊ばして居るかと思ひました左様ナ悪戯をなすつては若物が汚れますイヤ此方へお出で遊ばせと抱きかへんとなした時に十八イヤ乳母は今日は釋伽如來の涅槃に入らせ給ふ日なり暫らく待てと仰せられて又念佛を唱へました乳母が乳若君釋伽如來の涅槃とは何んのことと申すのヒ八涅槃とは此の世をすて、安樂の淨土に赴ひくことを申すのヒや乳安樂の淨土とは何んでございます十八極樂往生をいたす

記代一御人聖鸞親

ことだ其の方とは之れが分らんか四才になる余の存じて居ること
を其方は存せんか乳四ツの貴下が御存じで廿八の妾くしが知
りません十八凡俗には困ると仰せられたるれをお庭に來て
後ろで密と聞きた有範卿が思はずれ笑ひ遊ばした有之れし其
方は凡俗であるか乳御前様凡俗とは矢張り盜賊人の類ひで
ございますか有凡俗とは只の人と申すことじや乳母は之を聞
てマア若様のお人の悪ひことと顔に紅葉を散しました然るに御
母上御懐妊ましくて重ねて男子出生したまひお名を淺麻呂と
申し恰度此のね方が二才の時有範卿風の心持と打臥し給ふが元
で御逝去に相成る時は安元の二年五月の十八日でございます十
八公麻呂四才の時借て御幻弱にして御父上に別れいよ世の
あぢきなきを感じ遂に出家を遂ぐるといふ親鸞聖人佛門に歸依
するのお話してございます

記代一御人聖鸞親

第二席

借て有範卿が御逝去遊ばされまして十八公麻呂は悲しみの御涙
だかはお隙とてなく持佛堂に入て念佛をなし父の後世を吊らひ
猶ほ母上吉光女に御孝養を盡されますのは幼年とは思はれませ
ん然るに或時母上に向はれて十八時に母上私くし幼けなくいた
して父上に別れたるは世の應報にや候はん御存生の折露程の孝
行も仕らず殊に残念至極に存じまする依つて願はくば出家と相
成り遠く浄土にまします無き父上に孝行をいたし又母上のお傍
近く仕へませうと存じますか如何なものでございませうと申し
上げる母上は落る涙だを拂ひまして母和子の志さしを冥途
にまします父上が聞れなば嘸も悦ぶことでありませう左はい
へ御身は富家の嫡子に生れたるものなれば父上の跡目を相續な

親鸞聖人御一代記

し官位どもに昇進なし末世に至るまで名を輝やかし給ひなば今
出家いたして冥途にござある父上を吊らふより之に上越す孝行
はありませぬ依て出家遁世の望みは思ひあきらめよと仰せられ
ると元來孝心深き十八公麻呂が十八左様でございますかど母の
言葉に従がひ一時出家は思ひ止まりました翌安元三年に相成る
と十八公鷹は五才淺磨が三才になる然るに父上有純公の御舎兄
從三位若狭守範綱公と申す博學秀才の歌人がございます夫れに
其の次の伯父さんで從四位宗業卿と申す人は手跡が見事で十七
才の時勅命を蒙り十日の間だに万葉集といふ歌の本を一筆
に書たる御方でございます此の兩伯父に就て學文を修業いたし
ましたが實に其の御進歩の速やかなること驚ろくばかりでござ
います時に治承元年五月廿一日に以上吉光女が初初の病ひが原
因で御逝去になる十八公麻呂のれ歎きは一通りではございませ

親鸞聖人御一代記

せん伯父の範綱宗業の兩卿がさま／＼に宥めすかしまして菩提
を吊らひました茲に於て若君は彌々出家なさんの志ろさしかた
く度々伯父さんに願ひましたからソコ然らば出家になさんと
範綱卿が承諾いたされました範其方は何に宗門へ入つて誰を
師として學ぶかといふと十八左様でございます私くしは天台宗
に入つて慈鎮和尚のれ弟子になり度ふございます 範然らばと
いふので御承諾をなさいました時は養和元年の二月十五日で
さいますすうれから若君をつれて京都粟田口青蓮院に住はれる慈
鎮和尚の元を問はれました此の慈鎮和尚は法性寺關白太政大臣
忠道公のお子で山門第六十二代の坐主にて前の大僧正慈圓道快
と申します慈鎮といふのは諱名であるが通りがよいから慈鎮で
お話しをいたします恰度此時年が廿七才博學秀才の生佛である
之へ参りまして範綱公が十八公麻呂出家になさんと御依頼にな

記代一御人聖鸞親

と慈鎮和尚が熱々若君を詠め満面に笑を含み 慈凡ろ我が天
台宗に入りて出家なさんとする者は先づ俗の姿たにて九ヶ年の
間だ勤學いたし其の效果して人を濟度するの學力あるか否やを
試し官へ願ふて御免しを受け始めて髪を剃り落す故に之を得度
と申す之れ皆出家になれるやなれざるやを試みる爲めである
然るに此の小兒幻けなくして斯の如き志ろさしあること實に宿
縁のなす所るか最とも其の相を見るに凡人ならず天晴後には名
僧智識となるでござらふれ故に此の試験をいたさす明日得度
いたさせませう 絶有難きお言葉さす之も悦ぶでござらふ此
時に十八公麻呂が十八只今上人の御承知ありしを承たまはり有
難き仕合に存じます 慈イヤ幼年といひ此度出家得度いたさん
の願ひ神妙に存する 十八明日罷越し御剃刀を頂だき墨染の姿た
と相成るでござらう就ては思ひ當りしことあれば硯と筆を拜借

記代一御人聖鸞親

いたしたしと二品を乞ひ受けまして懐紙へテラ〜と一首の和歌
を認ためました
あすありと思ふ心の仇櫻
思ひたづたが吉日とやら人間の壽命は限りあるもの九年の間だ
たの人の通りの姿たになつて居て佛學を修業なしソコデ試験
を受けて真どの出家になるが天台宗の掟てであるといふが明日
をも知らぬ命ちでソナナ氣の長ひことをしては居られない夜は
あらしのふかぬものかやとなされました此の歌が今日に至るま
で門徒衆の坊さんが金儲けをする歌でございますエヘンと咳拂
ひを前置に御法談をするのに ○如何に参詣の人と人間の身体
は四季にならへて居るテ春は目がかすみ夏は耳がガン〜と
なり秋は木の葉の落るやうに齒は落ち頰に頂たく霜の暮かなぢ

記代一御人聖鸞親

や……既に御開山慈の歌にあすありと思ふ心の仇櫻夜はあらし
のふかぬものかや人の命ちは朝日に向ふ霜の如く考がへれば果
ないものや嬉しひ時にも南無阿彌陀佛悲しひ時にも南無阿彌陀
佛只なむみだぶつと稱ふれば彌陀の淨土へ生生なすに相違を
さらんと來ると傍に居る坊さんが ○御冥伽上げられませうと
催促をする之を聞いてちいさんややばアさんがバラく慈鎮和尚が
て慕口も女夫巾着も皆んな空になつてしまふ時に慈鎮和尚が
心をいたし直に道場を開かせ出家得度をさせました時若君
の門弟性絶といふものがいたしおくしをれるしました時に若君
九才……時に慈鎮和尚が水晶の念珠にて頭をなで 慈過去諸佛
物成就無上菩提故捨飾好剃髮鬚髮則發願言今落髮故願與一切衆
生斷除煩惱及以習障と高らかにいはれました之は何ういふ譯か
といふと髮を落し衣を染るは菩提の道に入ることを願ふ故に見

記代一御人聖鸞親

ざる凡ての物を捨るのである則はち佛になるのだから決してし
やれませんといふ意味でございますソコデ法名を純宴仮名を少
納言と慈鎮和尚が授けました其の後數ヶ月の間は慈鎮和尚の
下に居られましたが何分都は物騒がしく勉強をいたしたいが願
擾しひのが障りになるソコデ慈鎮和尚に願ひをいまして比叡山へ登
り大乘院に學びました申し上げるまでもなく比叡山は天子様の
御祈願所で早くいふと坊さんの大學校でございますコ、デ修業
をしなればトテも一人前の坊さんにはなれない借て純宴様は
一心不乱に佛學を修業をいたすれを聞いて慈鎮和尚が感心いた
しました或時關白様の屋敷へ上つて四方山の物語りの末に
慈鎮和尚が 慈拙者の門弟に純宴と申す者がありませす之は殿下
にも知られる如く有範卿の嫡子なるが先達て拙増方へ参り佛門
に歸依いたさんと強ての願ひに聞届け遣はし出家得度いたさせ

記代一御人聖鸞親

ました。が當時、御山なる大乘院に學び幼年とはいひながら一山の
人々を驚ろかす程の才學にございます。彼等を眞の生佛とも申し
ませうかといふと、關白殿下が、關兼て呼ばには承たまはりたれ
ども、高德の開ねある貴僧、ダヨモヤ彼を弟子にはいたすまじと存
じ居りしが、強々呼ばに違はず有範の作を門弟にせられしか。慈
彼を拙僧の門弟にいたしたるは、何故惡ひのでございます。關去
れば、彼は未だ幼年ではないか。慈御意にございます。當年九才で
ございます。關九才のものが何時貴僧の門弟になつた。慈先日
拙僧の門弟になりました。關髮は剃落し衣は染めたか。慈如何
にも佛門に歸依いたしたものの飾りを落し墨染の衣とかへさせま
した。關和尚にも似合しからんことをするではないか。天台の宗
法として、假令佛門に入るとも九ヶ年の間、たは俗の姿にいたし
其の後彼の學び得たる處ろを試し果して出家になれると見てよ

記代一御人聖鸞親

り始めて飾りを落し衣をかへるが天台の宗法と承たまはる然る
に其様なこともいたさず直ちに飾りを落し又衣をかへるは甚は
だ其の意を得ざることを後日天朝より咎めあつたら貴僧は何ん
と申し開きをいたさるゝかといはれて、慈鎮和尚は思はずアハ、
、と笑ひました。關白殿下も少し危にさはつて、關何がおかし
ひ。今日法を破つたを咎められたが何んでおかし。慈イヤ凡夫
が何をいはれるか。關之は無禮……今一言いへど顔色をかへま
した時に慈鎮和尚答へて、慈人を見て法を説けどは能きたどへ
九年の間、た俗の姿になして學びし處ろをためすは無智の凡夫
にいたすべきもの。籠宴の如き智慧あるものは其例を用ふべから
ず。若し後日天朝よりお咎めれば此の慈鎮再たひ念珠は手にい
たしませんといはれました其の答へに殿下も、關ウン左様かど
いはれて此の問答は果ましてございます。名僧といはれた慈鎮和

記代一御人聖鸞親

尙が斯までにははれたるは聖人の並々ならぬ處ろへ目をつけた
故でございませす借て其の年のことであつたが叙山にありし絶塞
様が登壇受戒をいたさんとすると一山の坊さんが不平をならべ
ました此の登壇受戒といふは早くいふと一人前の坊さんなるの
でございませすれ故人々が ○何うも十才未慢の小兒が戒壇に
登りし先例はない如何に凡人でないにもしろ我々をないがしる
にした仕方である甚はだ不都合だと名々不平をならべだした絶
様は少しも頓着いたさず今や戒壇に登らんとするを大勢の僧
さんが ○アイヤ暫らくお控へなさい 範例等の御用向か ○
左れば當嶽山の例として十才未満の小兒が戒壇へ登つて佛典を
讀じたる先例がござらんしばらく控へなさい 範否なことを
承たまはるものがな十才未満の小兒故戒壇へ登り佛教を請する
ことが出来んとは誰人の定めたる掟てなるか承たまはらん ○

記代一御人聖鸞親

イヤ何人も定めたることはござらんが 範なければ宜ではない
か ○イヤ先例がござらん故相成らん 範先例がなき故相成ら
んとは彌々否なことをいはれるものかな凡ての物を先例に則と
らんとすれば此の世にあるもの一として進歩の功はあるべから
ず八万の經卷を讀は只れの心の心に工風を重ぬるの便りとなす
例へば暗夜に燈火を持って道を照すが如し死したる者には燈火あ
りとも道の方角は分かるべからず先例なきが爲め何事も控ゆれ
ば此の世に一ツとして新たに發明することはなからん借ても自
痴たることをいはれるものかなと更に恐るゝ色もなく滔々と述
べたてた成程之は理屈でございませす此の世の中に先例にない
いつて何もせず居ればいつも大昔しのやうになつて居て少し
も進歩の功はございませせん古來にたゆみのないことをするから
世の中が進んで行くのです流石大勢の坊さんもハツと返答に當

記代一御人聖鸞親

惑をしたが ○イヤ何んといつても先例がない故戒壇に登るこ
とは出来ん無暗に例にかけるくといふ富士講の先達が山でこ
ろんだやうにれいがかけるといつてゐる處へ方々しばらくど
聲をかけながら這入つて来たのは天台の坐主慈鎮和尚でござい
ます多くの坊さん方は之を見るとハッと平伏をする時に慈鎮和
尚が 慈如何に方々うれ登壇受戒は智慧あるものか智慧なきも
のかを撰んで年の老若は論せん昔し龍女は八才にして諸法實相
を悟り白川の先徳も九才にして登壇せられし例しもあり又範
は幻けなきものなれども其の智慧受戒登壇の出来得べきもので
あるうれども受戒登壇は年を以て論じ智慧のあるものを撰ばぬ
か答へあれば聞んといはれ一同がハツといつて答へをする者が
一人もございません慈鎮和尚笑を含みまして 慈各々は近眼と
見へて今のことのみ分つて昔しが見へぬと思ふ以後朝夕冷水を

記代一御人聖鸞親

第三席

以て目を洗ひ遠くの見へるやういたしたがよからう範宴苦しく
ない登壇受戒あるべしといはれまして直ちに登壇受戒をいたさ
れました一山の坊主ども何かあつたらば範宴を驚ろかしてやら
うと待て居たが元來行なひの堅固なる方であるから誤まりとい
ふことがございませぬいよく 學徳共に進むを見て流石の人々
が成程ユライ人だと始めて感心いたしました跡は次席に委しく
申し上げるといたしまして鳥渡わたくしもこゝらで休息をいた
します

倍て親鸞聖人の範宴は深山に於て佛學の御修行を遊ばし尙ほ其
の上漢籍を學び和漢に通じ實に稀有の智識になられました恰度
建久の二年十九才の時七月の中旬大和の國法隆寺へ御參詣を思

親鸞聖人御一代記

召したてられ師匠の慈鎮和尚に別れを告げお暇を賜はり叔父
さんの範綱卿より御介錯に付けられたる正全房を召し連れ大和
に趣むきまして御承知の通り法隆寺といふのは八宗兼學の大寺
で只今寶物にございますものでも千年以下の物はございません
寺内に鏡ヶ池を名付けたる池がございましてそれへ聖徳太子が
自分の姿たを映し左うして自分の像を造られたといふ先づ日本
の内々で第一番に指を折る古ひ寺でございますより九月の十
二日河内の國石川郡東條磯長の里なる聖徳太子の御廟に御参詣
をなすつて十三日より十五日まで三日御参詣をなさいますし
然るに十四日の夜の丑の刻に夢ともなくうつゝとも覺えず聖徳太
子がりれへ出現をいたしましたしまして光明赫々として四邊を照し全
で盡の如くでありましたハツと範宴驚ろひた時に微妙の御聲を
出され

親鸞聖人御一代記

我三尊化塵沙界 日域大乘相應地 諦聽々々我教令
汝命根應十餘歲 命終速入清淨土 善信々々真菩薩
是れが耳に聞へたかと思ふと掻き消すが如く姿たが見へなく
なりました範宴奇異の思ひをしたが此お告げが中々分らない此
のお告げの内々汝命根應十餘歳の文句があるが是れを普通に考
がへて見ると汝の命ちは將に十余歳と考がへる然らば今十九才
だから向ふ十年しか生きないといふお告げかも知れない類りに
お考がへ遊ばした時にお傍に居た正全房が範宴様に向ひまして
正只今金色の光りが此のお堂の内々に輝やきてたりました如何
なることがございましてか尋ねたけれども斯ういふことであ
るといふことは心配をすると叶ないからいはない 範此の方に
も只光りのみ見へたが恐らくは聖徳太子我が信心を感能まし
仮りに光りを現はしたのであらふと仰せられました然し何う考

親鸞聖人御一代記

がへても此の文句が分りません是は廿九才の時始めて聖人が
天台宗より淨土宗に入つて念佛を以つて無智の凡夫を救はれた
のでございます其のお告げであつたが此の時には分らなかつた
南鶴の悪意なもので善兵衛といふ人がある此の人が恐ろしい観
世音を信心いたしまして神田から淺草へ日参をする昔の話し
であつたが或る朝觀世音様へ往くとバラ／＼と紙が一枚飛んで
來て善兵衛の懐中に這入つたうれを取つて見るとオウクワシア
ルベイサトレンベエとしてあるサア善兵衛が驚ろひた全たく
觀音様のお告げだと思ふから神田の永富町の巳れの家へ歸つて
來まして ○サア早く片付ける子供は本所の親類へ逃してしま
へ何にしる大變大火事があるから早く道具を片付けなければ叶
ねエと頻りに騒ひて居ります女房が驚ろひて 女お前さん氣で
も遠つて居るのではないか半鐘の音も聞へないではないか 善

親鸞聖人御一代記

遠き處んばかりなき時は近きに憂ひありといふことがある觀音
様ののれ告げで火事があるに違ひない無暗に荷物を始末をして本
所の親類へ引越した近所では善兵衛氣が違つたと噂さをして居
ると慶應の三年十一日の九日夜の九ツに神田の永富町の紙屑屋
から火事が出た佃まで焼き拂ひましたサア此のことが評判にな
り何うして善兵衛が此のことを知つたかと皆々不審に思ひ自然
町奉行に此のことが知れたから奉行が善兵衛をね呼び出しに
なつて何うして此の火事のあることを知つたとお尋ねなされると
善兵衛が 善左様でございます觀音様のお告げで知りました奉
行何ういふお告げがあつた 善此の紙が火事の前に私くしの
懐中へ這入りました見ると委細のことが認ためてありました大
火事あるべエ悟れ善兵衛としてありましたからソコ親類へ引
き取りましたお奉行も驚ろひたのは夢の告げといふのはあるが

親鸞聖人御一代記

字に書て来たのはない何れ見せると其の紙を取り上げて見ると
平仮名で

おんくはしあるへいさどれせんべい
としてあるコ一問違つた節には大變です然し是れも信心の徳で
未然に災はひを防ひたのでございませう然し親鸞聖人杯は生佛
でございませうから此の告げを有難く心得て河内の國より都に
引返し一心不乱に御修行をなさいました建久の九年初春のこと
でございませうが聖人御年廿六才比叡山へ登り玉ふ進すがら赤
山明神の御寶前に参り徐かに祈念をして居ると瑞籬の陰より怪
しげなる女性一人出で来りました其の顔形ち尤と氣高く柳裏の
五ッ衣に白の緑色の被衣を頂ださ……此の被といふものは御所
杯へ勤め奉公をする婦人なすが重に用ひましたはる蚊張のやう
ナものでございませうツカ〜と籠裏様のお傍に近御り 女失禮

親鸞聖人御一代記

ながら貴僧は何方より何處へお出で遊ばすのでございませう傍に
居た供の者が「イヤ是は京都より此の山へ登るものでござ
います 女左様でございませうか妾くしも比叡山へ一度は参詣い
たさんと存じましたが俗事に取紛れ本日まで心ならずも参詣の
出来ませなんだ漸々今日は些さかの隙を得ましたから是へ参り
ました何が始めのことで道の程も能う分らず甚はだ難儀を
いたしました一樹の陰の雨やさりも多生の縁とやら申すこともあ
り人を助くるは出家の役何卒御同行を願ひます露の如き麗はし
き面に柔和やかなる笑を含み申されますと傍に居た其の者は身
に魂しひも添はず治で人間の扱売のやうになつて忙然して見て
居りますやゝあつて籠裏様に向ひ「御婦人が始めての御登山
で御難儀だと申しますから私にくしが脊負てお連れ申しませうと
いふと籠裏様が「籠コレ〜」待て失禮なことをいたすな……ア

記代一御人聖鸞親

イ御婦人貴嶽は何れのお方が存せんや女子のこと故何にも御存しないと見へる折角のお頼みだがお連れ申すことは出来ん女うれば又何故でございます 籠れば此の御山を開かれたる傳教大師が女人禁制と記し王ふ建札がござる抑も 此の比山は尊とき峯高く信すべき爲深く女子は汚れるもの決して登山は相成りません左れば誰やらの歌にうらやましくも登る花哉と申すことがある速やかに是より歸り玉へと申しますと女子は涙だにくれ 女さてく 情けなきことを承たまはるものでございます傳教はどの智者が何故左様なことをいはれましたか妾は愚昧と申せども日頃誦する經文の中に一切の衆生は悉く佛性ありと見へ玉ふ然らば男女の差別なく生きとし生けるものは皆佛になるべき徳を備へて居るもの如何に女禁制とは申せ此の山には畜類に至るまで女たるものはございませんか男子のみ獨

記代一御人聖鸞親

り佛になつて女子は佛にならんとは如何なる經に説れたるや伺がひどう存じます流石の範宴も少しく答辨に差支へた如何に女禁制だといつて畜類や又は虫或ひは獸物まで禁じるといふことは出来ぬ人間は道理が分るから女人禁制といふ札を見れば歸るかも知れないが鳥畜類は人間に用ひられる文字は讀めませんから此方で建てても向ふから遣つて來る獨り人間にのみ禁制をして鳥類畜類を棄て置くといふは片手落だ時に婦人は莞爾と笑を含み 女既に法華經の中に八才の龍女成佛得脱したといふことが認めためてございますそれをしも知らずに傳教が女人禁制をいたしたのでございませぬ然しながら左は嫌はるゝといふもの強て登らんといふ心もなし實は此の山に登りなば名僧を尋ねて捧げんとして些さか茲に持參をしたものがございます今はよしなし貴僧に之を參らせんと袖の下より取り出したる玉を

親鸞聖人御一代記

範宴に渡しました女是は天日の火を取る玉でございます貴僧
を知る如く此の世界に日輪より高く尊とさものはございません
又土石より低く陋しき物はございません併し日輪が何程尊とさ
ものにては燈火となりて家を照すと云ふことは出来ませぬ此
の陋しき土石の玉に映りてこそ暗夜を照す寶とはなりませぬ佛の
道も左の如く只高きにのみ居て何んの用かあらん高嶺の水も嶺
にのみありて用かあらん低く陋しき谷に下りてこそ總ての物を
濡らす功がございます他の道とても徒づらに凡夫を驚す非難し
き理のみ説て何んの用がございませう貴僧は未代の智識とこそ
見たてまつりたり何卒玉と日と相重なる理由を後にこそ知り玉
ふべしといひつゝ其の玉を渡すよと思ふと紫さきの雲に打乗つ
て西の方に飛び去つたは之れ親世音でございました供の人が驚
ろひて能く理屈をいふ女だと思つたが親音様では先方が本家で

親鸞聖人御一代記

此方が出見世だから敵はない譯だと思ひました範宴様も成程今
のお告げの通り高尙な理屈ばかりいつても中々凡夫を救ふとい
ふことは出来な之は塵の浮世に交はつて左うして人を助けや
うと思ひました左ればこう門徒宗は他の宗旨と違ひまして肉も
喰べれば女房も持つ酒も呑む少しも普通のひと異りません之が
普通のひと交はつて人を救ふ秘傳でございます借て建久は九年
で終つて翌十年正治と改元ありました範宴様が年が廿七でござ
います翌正治二年廿八才の時の九月師の慈鎮和尚が御所に召さ
れましたお歌の題を下されかれました見ると戀といふ題でございま
す女を犯さん者に戀といふ題は些と難題が然し博學のお方でご
さいますから

我がこひは松を時雨の染めかねて
眞圓ヶ原に風さはぐなり

親鸞聖人御一代記

拙僧は坊主だから只だ思ふばかりで目的は遂げられないといふ歌でございませう恐れ多くも是が天覧に相成り歎ある歌の中で秀逸に抜けた處ろがお公郷様が ○何うも生涯女に交はらない坊主が此の戀の歌がコト甘く出来るもんではないことに依つたら彼の範宴和尚女を犯したことがあつて戀の何んたることを知つて居るのではないかと一人がいふと又一人が ○左ういへば此の間彼の寺の前を通つた時に廿一二になる束髪の方が海老茶の袴を穿て門へ道入つて往つたが何うも怪しひなすと噂をする誠とに範宴和尚は迷惑至極でございますソコお公郷さま方が評議をして少しも坊主の知らない題で最う一度歌を讀せるといふので鷹の羽の雪といふ題を下された鷹は身分ある人の拳しにすゞつて他の鳥類を取つてなくさみにするものうれに羽風の劇しひ鳥で中々雪なすが積るべきものでない然し範宴和尚

親鸞聖人御一代記

は博學の人だから考がへて一首の和歌をしたゝめたそれを範宴機に持せて遣りました是が満足に出来なければ先の戀の歌も疑がひを疑ひつても仕方がない何んでもないやうだけれども慈鎮和尚の身にと一世の大事でございますそれ故範宴様を召されて此のお使ひを申しつけました範宴様が早速之を持參をして參内に及びれ歌所へ參らせましたから早速奏問を遂げ此の鷹の羽の雪といふ歌を見ると
雪ゆれば身にひきうる箸鷹の
たいさきの羽や白ふ成らむ
實に恐入つた名歌でございます恐れ多くも主上を始め諸臣各々掌を拍つて感心をいたして今更ながら慈鎮和尚の博學を賞異いたしました時に今日の使ひは何者であると勅問之れあつたる節にお歌所が前の皇太后大進藤原の有範が子にして當時三

記代一御人聖鸞親

位範綱の養子少僧都範実と申すものにござりますと奏問を遂げ
た然るに主上僧は有範が息にてありつるか養父三位も名高き歌
詠みなり殊に師の慈鎮和尚も斯ばかりの名歌を詠するものなれ
ば範実もさずかし歌は上手ならん速やかに仕まつるべしとの勅
命でございます直ちに範実階段下に召されお歌所より此の命を
傳へられて先きに慈鎮和尚が鷹の羽の雪を詠じたから今度は身
よりの羽を詠すべしとの御沙汰でございます範実機しばし考が
へた後

箬鷹の身よりの羽風ふき立て

おのれと拂ふ袖の白雪

と詠み上まつり玉ひし故主上始め数多の公卿等擧つて流石は三
位範綱の養子慈鎮和尚の弟子なり大いに賞美いたしました主
上叙威の余も檜皮色の小袖を下し給ふ範実恭じけなく頂戴して

記代一御人聖鸞親

御所を立出でましたが道々考がへましたは今度の歌かうまく詠
めたからよけれ若し仕損じた時には師匠を始め養父の範綱公も
迷惑をいたすであらふ畢竟我が天台宗といふ名門宗門に歸
依いたして天子様御祈願所に居るからコイいふことが出来たの
だ此の後進も度々公卿に召されてこういふ大事であるであらふ
何うか斯ういふことのないやう世を免れたいと思召しましたる
れが爲めに此の後はいよ佛學に身をゆだね密かに大和法隆
寺の覺運といふ和尚さんへ今生の遺品として廿五條の袈裟を送
り又仁和寺の慶尊法師の元へ七條の袈裟を送りうれとなく遁世
の意を漏しました此の時に正全坊が僧は先年聖徳太子の御堂に
於て御告げがあつたが彼の時は何にも知らぬつもりにいたした
が汝命根應十歳とあつたから最早彼れから八年も過て居る自
分の命ちが向ふ二ヶ年位ぬと思召して御遺品をお遣はしになる

記代一御人聖鸞親

位範綱の養子少僧都範実と申すものにござりますと奏問を遂げ
た然るに主上儲は有範が息にてありつるか養父三位も名高き歌
詠みなり殊に師の慈鎮和尚も斯ばかりの名歌を詠するものなれ
ば範実もさうかし歌は上手ならん迷やかに仕まつるべしとの勅
命でございます直ちに範実階段下に召されお歌所より此の命を
傳へられて先きに慈鎮和尚が鷹の羽の雪を詠じたから今度は身
よりの羽を詠すべしとの御沙汰でございます範実機しはし考が
へた後

箬鷹の身よりの羽風ふき立て

おのれと拂ふ袖の白雪

と詠み上まつり玉ひし故主上始め數多の公卿等擧つて流石は三
位範綱の養子慈鎮和尚の弟子なりに大ひに賞美いたしました主
上叙威の余り楢皮色の小袖を下し給ふ範実恭じけなく頂戴して

記代一御人聖鸞親

御所を立出でましたが道々考がへましたは今度の歌かうまく詠
めたからよけれ若し仕損じた時には師匠を始め養父の範綱公も
迷惑をいたすであらふ畢竟我が天台宗といふ名門深き宗門に歸
依いたして天子様御祈願所に居るからこゝにいふ大事であるであらふ
だ此の後進も度々公卿に召されてこういふ大事であるであらふ
何うか斯ういふことのないやう世を免れたいと思召しなしたる
れが爲めに此の後はいよいよ佛學に身をゆだね密かに大和法隆
寺の覺運といふ和尚さんへ今生の遺品として廿五條の袈裟を送
り又仁和寺の慶尊法師橋の元へ七條の袈裟を送りそれとなく遁世
の意を漏しました此の時に正全坊が儲は先年聖徳太子の御堂に
於て御告げがあつたが彼の時は何にも知らぬつもりにいたした
が汝命根應十歳とあつたから最早彼れから八年も過て居る自
分の命ちが向ふ二ヶ年位ぬと思召して御遺品をお遣はしになる

記代一御人聖鸞親

ことだと思ひ頼りに涙だを流しました是はこう考がへるのも最
どもでございます範宴様はさうではない世の中の交はりが厭だ
即ち世をのがれんといふ思召しでございます比叡山の無動寺
大乘院に参つて十月一日より三七日の間だ根本中堂の本尊樂師
如來と山王の七社とへ毎日毎夜参詣をなして断食をし何卒未代
の凡俗愚かなる男女に極樂往生を遂げさせることは何れの宗旨
によりてつとめ容易又行なひ易くすることがなりませうか何卒
有縁の法と眞の智識と備へたる名僧を得さしめ玉へと祈願をい
たしました處ろが師匠の慈鎮和尚は自分の宗旨を免れて他に方
便の宗旨を得やうといふので参詣をして居るとは知らんから自
分の弟子權智持性範といふものを御使ひとして比叡山へ登せ無動
寺を問はせましたことは先達てお歌の會の時も其の後如何と思
ひしに此度南都或ひは仁和寺等へ送り物をしたといふことを師

記代一御人聖鸞親

の坊は氣がかりに思召して居るそれに三七日の間だ参籠を期
師如來にいたし又断食なすをいたして居るといふ由右は如何な
る心ろであるかと尋ねました時に範宴様實は「一だ」と話しが出
來かねる依て範御心痛下さる段誠に忝じけなふとざるが別
に仔細もございませぬ只父母善見の爲め且は學文の爲に参籠を
いたしたことでございませぬ決して断食なすといふことは跡方も
なきこと何れ行果てましたならば御元へ参り委細のことを申し
上げませうと答へましたソコテ使ひを返へし三七日の間だ参籠
をしたが何等の験しもございませぬ如何にも残念に思召したが
仕方がない十月廿二日に比叡山を下つて直ちに粟田口青蓮院へ
來ると師匠の慈鎮和尚は待籠てうれへ立出で命ちありしかと一
とこと申して涙だにくれましました翌日和尚を範宴様も二人揃つて
聖光院へ歸りました是は當時の住居でございませぬ俗て十二日上

親鸞聖人御一代記

句正全坊といふ從者をつれて又々比叡山無動寺へ参り密行をい
たされました密行であるから誰にも逢ません給仕は正全坊はか
りでございませす如何なる譯で斯ういふ行をなされるかと思つて
或夜次の間よりそつと伺がひ見ると一つ燈火幽かにして遙かに
西南の方に向ひ手を合はせて額いにて一心不乱に聖徳太子の
お告げのあつた我三尊化座沙界日域大乘相應地諦聽々々我教命
汝命根應十余歳命終速入清淨土善心々々眞菩薩と頻りに念じて
居りまする之を見て正全坊は倍はいよ／＼御壽命の盡るを知つ
て斯く密行をなされるかと涙だ流しました是はさうではないの
で之を唱へて然して聖徳太子のお告げを尋むらんといふのでと
さいませす處るへ師の慈懐和尚より聖光院の坊官木幡民部が密行
の御見斜として参られましたが目通りは出来な行中であるか
ら逢ません正全坊に委細のことを申して立歸らんとすると門ま

親鸞聖人御一代記

で送り出して来た正全坊が正民部殿今度の密行は容易ならん
ことございませす今年中に範宴様はお逝去と思召して斯く密行
をなされるのでございませすと申しました民部大さに驚ろき民
聞きすて難き其の一言如何なる仔細で左様いはれるかと問はれ
た時に正全坊が正左れば建久の三年の秋河内の國磯長の里な
る聖徳太子の御廟に参籠の折りから汝の命ちは正に十余才とい
ふ御告げを蒙りました範宴様は私くしにお話しはございませ
んが疾くに私くしは心得て居りますと申しました民部驚ろひ
て早々立歸る範宴様は一時十余歳といふことに就て自分の壽命
が向ふ十年だと思つたが考がへて見ると前の言葉にれ前能くお
聞き凡夫を救ふ手段がある能く信心をすれば眞どの菩薩になる
といふれ告げでございませすそれだからむづかしひことでなく難
にでも分るやうな方便を得てさうして大勢の人を救ひたいと思

天台宗ではさう容易は叶ん何うか其の容易い法を教へておくんなさいといふので密行をして居るのでございませぬ處へ丹誠を感能まし〜たか始めて念佛門へ這入れれば人を助けることが出来るといふお告げを蒙るといふ抑も〜之が他の宗旨にない肉食妻帯をしても成佛が出来人を救ふことが出来るといふ門徒宗の骨といふ肝心の處るのでございませぬが以下臨々に啗で含めるやうむづかしひ講釋を子供衆にも分るやう申し上げるといたしませう

第四席

前にも述べたるが如く佛のれしへは迷ひを晴して樂を得るといふが目的でございませぬ然し夫は中々むづかしい話しでありまして一朝一夕に其迷ひの晴るものではございませぬ自分が修業をし

て迷ひを晴すを佛の教へで自力門といふ自力とは自から勤めて悟りを得るといふこと自分ばかりでなく他の人を救ふと他力といふ自分で勉めて迷ひを晴すを自力…他の迷ひを晴してやるのが他力…エンチカホイと懸懸をするのが車力…然らば下ウいふ教へに依たらば人の迷ひを晴して極樂往生が出来るかとか考へまして何か其教へを知らせ下ださいと聖徳太子様や觀世音へ願ひましたが更にしるしがございませぬ然るに叡山の大乘院に於て密行をあらばされ祈念いたして居る師の慈鎮和尚よりの使ひに参つた民部が正全坊より聖徳太子の告のあつた昔の話しをして宛々様は御壽命の盡るを知つてそれが爲末來の極樂往生を願はれてゐるのであると申しました民部大いに驚るひて早速立歸り此ことを慈鎮和尚に話しをなさいませぬ和尚も涙だにくれ借はさうかと思召しました然るに正治三年が改た

記代一御人聖鸞親

よりまして建仁元年となり範宴様が二十九才になる當時は少僧
都になられて居ります少僧都とは坊さんの位で有りませ其年
正月の十日より鳳山無動寺の大乗院にて大願を起しまして密か
に北洛六角坊の如意輪觀世音に一百日の祈願を結まして其日
り毎夜參籠いたしませ此行程三里半もありませ西坂赤山越な
かの恐ろしき道の悪さも厭はず春とはいへ未だ雪消ぬ寒さに
も恐れず一夜も怠たりなくお通ひなされませ然るに茲に淨土
宗の名僧にて念佛の行者法然といへる人が京都の吉水といふ處
で御説教をなさいまして多くの男女を救ひ居ります此方の教
へは肉もたべるがよし女房を有るもよし決して坊主になつて修業
をしなければ佛にはならぬといふのではないドンナ凡夫でも之
を信心すればキツと佛になる其信仰をすべきは阿彌陀様であつ
て唱へることは南無阿彌陀佛の御念佛であるといふのです之れ

記代一御人聖鸞親

を不斷煩悩得捨棄といふ煩悩を斷ずして直に安極に入るとの教
へである之れをきいて範宴様が借こり觀世音の引合せなりと法
然上人の處ろへまかりませ始めて念佛門に入りませして善信坊
緯空と改ためましたコ、デ氣がついたのは先年聖徳太子のお告
のことですさりませ汝命根應十餘才といふことだ十九の時に此
お告を蒙りつて今年二十九才則はち十年目にコ、いふ結構なる
宗門へ這入つて多くの人を助ける爲であつたかと考がへませた
正信戻も始めて安心をするし先の師匠慈鎮和尚も自分の宗旨天
台を捨て念佛に入りしは僧ひ奴どは思ひながら聖徳太子のお告
もあること故殊には人を助けるが出家の役つまり念佛で人を助
けるも天台宗で人を助けるも同じことであると思召で其儘にな
されませした借て善信坊緯空は法然上人に隨がひませして三年の春
秋を送り給ひ建仁三年となる四月の五日の夜のことでありませ

親鸞聖人御一代記

が吉水の法然上人の下に麻みあると此時の夢は六角堂へ参詣して禮拜あらせられると觀世音が出現いたして

行者宿報説女犯

我成玉女身被犯

といふれ告でございます目覺て見とありくと耳に残つて居る之を極むかるやうにいふと念佛の行者が婦人を愛すも差支へがない私しが玉と名のつく女となつてお前の妻になり女を有ても佛になれるといふことを世間の人に見せてやるといふことであります善信坊不思議に思ひましたが誰人にも此お話しはいたしません明朝は六角堂へ参詣いたして日夜のお禮のお福を申されました抑も我が國へ佛の教への弘まりましたは人皇三十代欽明天皇の御宇十三年に當りて佛に經卷が日本へ渡來いたした此のことに就て守屋勝海等は是は人を感せるものであつて信仰をすべき價値のないものであると反對をいたしました蘇我

親鸞聖人御一代記

稻目等は大臣之を信仰をしてそれが爲めに用明天皇の第一の御手聖徳太子が佛様を信仰をしました遂に守屋を御退治なすつて日本に佛教が弘まりました昔しよりの傳説に寄ると聖徳太子は救世觀世音菩薩の化身で先の世は唐土衡山の惠思禪師であるとこのことでございます早くいふと本体が觀世音で惠思禪師の生れ替りだといふ偈又善信坊が信じましたる京都六角頂法寺の觀世音と申すは身の丈一尺二寸如意輪の御尊像でございます此の講釋は元來佛臭ひこととございますからソコは御勘辨の上開帳場のない立塲の様だと思召しなく御覽の程を願ひますコト有難ひことをいふからお賽錢を上げやうといふと困ります抑も如意輪觀世音の京都六角堂より來つた其の元を尋ねると唐土南嶽山に惠師禪師といへる道徳優れた名僧がおはしました或時門人に向つて曰く 惠吾此の世を去つて後は東海日本に生れて多くの入

親鸞聖人御一代記

を濟度せん吾滅後三十六年を過ぎたらば此の觀世音の像を日本國に送るべしと徳胤法師に御遺言あつて觀世音の像を預けまし
た問もなく惠常禪師は御選化あらせられる然るに徳胤法師熱々
考がへるに人間の命は旭日に向ふ霜の如し無常迅速と經文に
も説かれてある先師の遺言と申せ中々三十余年吾が此の先生て居
るか分らない然らば一日も早く日本國へ送らんと彼の尊像唐櫃
に納めて深をもつて水の道入らんやうに四方を塗り蓋の表に正
覺如意輪觀世音の像一軀日本國王家に送り奉まつる衡山光明寺
の住徳胤と書てある至徳二年八月の八日彼唐櫃を海に浮尊像を
拜丹精を慇懃し懐んで告て曰く徳觀自在の妙徳誤またせ給はず
ば願はくは東土日本に渡らせられ先師の願ひを叶へさせ給へど
尤も懇ろに祈りました然るに不思議なるかな此の本尊我朝人
皇三十一代敏達天皇の十三年冬十月淡路の國岩尾の浦の海に浮

親鸞聖人御一代記

びました光明が輝やき涉りましたから網を打て居た漁夫どもが
○何んだらふ向ふの方に光つて見へるのは四角な物が見へるが
妙ナ魚があるものだ何にしる往つて見ると八方から舟を寄せて
調べるると一ツの櫃でございます日本國王家に送り奉まつるの文
字があるから直ぐに引き揚げて之を都に送りました天子様御覽
遊ばして直に蓋を開かせ給ひたるに觀世音の尊容赫耀として居
りまする時に聖徳太子御年十三にならせ給ふが熟々此の本尊を
禮拜して宣まはく是れ我が前生の本尊にてありたりと仰せられ
常に御身を放し給はず非常に御信仰をなさいますした其の後太子
十六才にして守屋大連を誅伐し給ひ攝州難波に四天王寺を御建
立遊ばさん爲め其の御堂を建るに用ひる材木を得んと山城の國
愛宕郡なる林の中に分け入りました暫時森の下に休らひ給ひ守
り本尊なる例の觀世音の像を出して或樹の枝に之を掛け暫らく

親鸞聖人御一代記

して懐中に之を納めんとすると數百斤の重みがついて更に動き
ません太子熱々考がへるに之れ正しく此の地こそ親世音菩薩の
縁ある地であつて之に一寺を建立をしろとの御告げであらんと
考がへました處ろに一人の老人が現はれまして 老れ前さんは
親世音様の御堂を建てん爲めに木を探して居られるから此の木
をお用ひなさいへ十抱へもあらんといふ大樹を指さして致へ其
の儘漂然と立去りましたソコで太子が大工に命じ杉の大樹を代
らしめ此の木一本で六角の御堂を建て例の如意輪親世音の像を
安置しました其の後數年の星霜を経て人皇五十代桓武天皇が都
を京都へ移し大路小路を定め給ふ時此の堂が町の真中にあたつ
て妨害になつてならん所謂市區改正の邪魔になる然し聖徳太子
が御建立の御堂であるから無暗に取拂ふことは出来まい何うし
たものだらふと評議をして居りますると其の夕べ俄かに震動を

親鸞聖人御一代記

いたしましてさしも高大な六角堂が五丈ばかり北の方に退せひ
て往來が忽ちまに開けましたコゝいふ靈現あらたかな親世音で
ありますから善信坊の有難く心得深く信心をいたしました殊に
聖徳太子は親世音の御化身である佛敎は西天より此の東土に渡
り斯く人々が信心を仕出した元は聖徳太子の御骨折である此の
太子が厚恩を施さなければ凡愚の衆生如何でか極樂淨土に往
生をすることが出来ませう依つて夢を考がへると我が日本に於
て肉を食し妻を娶佛法を弘め多くの人の苦しみを救ひしは聖徳
太子である其の太子は親世音の御化身である其の親世音が吾に
肉を食し妻帯をして多くの人を救へといふお告げは正しく佛法
を弘めるといふことである肉を食すな妻も妾も人間を失な
ひ佛に仕へるといふのは無理な話である肉食妻帯を禁じて佛
様を祈らなければ成佛が出来ないといふ様では此の世の中に人

親鸞聖人御一代記

種を盡てしまふ肉も食へ妻を娶只の人とかはらんやうなことを
しても心さへ正しければ極樂淨土に往れるといふは抑々人の性
質を狂げないで佛様の道に分け入ることが出来る有難き人を救
ふ一ツの方便であるとか考がへました能くいふことで嘘も方便と
申しますが方便といふことは眞實のことを教へるに就て用ひる
手段でありまして決して嘘のことではない後ろに眞實があつて
其の眞正につれて來る道を方便といふ之はつまらないことで
さいますが念の爲め申し上げて置きます門徒の坊主は刺身で酒
を呑んだり湯灌場におしめを乾したりして有難くないといふが
何も親鸞聖人様が信實肉食妻帯をしるといふのではないとい
ふことをして人を教へ入り易い道に入れて迷ひを晴さるといふ
所謂方便でございませすそれを知らないで門徒の坊主が祖師が許
したから女も犯すし肉も喰ふ誰に遠慮があるものかと威張られ

親鸞聖人御一代記

ては困ります法律は守るべきもの道徳は守るべきものと極まつ
て居るが親類や他人に不實をしたことは懲役に遣られる氣遣ひ
はない同じ不實でも人の物を盗むと懲役に遣られる懲役に往け
ば苦しひから先づ惡ひことをしなさい同じ惡ひことでも不人情の
方は懲役にやられないから目に見へて苦しみがないうれ故日に
増し人間が不人情になつてゆきます本來門徒も肉も喰はせず妻
も娶せずさうして人を救へといふのが坊さんの主意でありませ
うがうれでは中々凡夫が守り兼ねるから肉も喰へ妻も娶て少し位
かな不實はして宜ひから懲役にゆくだけはお廢しなさいといふ
のでございませす是は中々門徒の坊主では樂屋であるから話し
せん南鶴は門徒の坊主でないから此のお話しをいたしませす然し
考がへると親鸞聖人は聚い方で七段目の由良之助の文句ではな
いが情夫があつたら添はして遣らふといふ極く粹な教へでござ

親鸞聖人御一代記

いさす然るに此の肉食妻帯のことが事實に現はれたといふのが
此處に九條關白兼實公と申し上げる方がございませぬを落され
て圓照禪定と稱し奉まつる都の西月の輪といふ處ろに御殿を建
てられ之にれ住居あらせられる故世の人稱して月の輪關白と申
し上げました此れ方が善信坊のお師匠さん淨土宗の名僧源空事
法然上人に御歸依遊ばしてお弟子となつて無二の信者となりま
した或時法然上人の居る吉水のお寺に参られていろくお話し
のあつた時關白殿下形ちを改められ九條偕て上人貴僧の弟子
は八十余人御坐つて何れも肉食妻帯もせず清き行なひ
を九め墨染の衣を着て形ちばかりは坊主であるが妻も娶つて居
れば肉も食す誠とに殘念至極なことである然らば眞どの出家の
念佛と吾々が唱へる念佛とは定めて功徳に勝り劣りがあるべし

親鸞聖人御一代記

何の位ゐの相違があるやと尋ねました成程是は最もな話しで
坊さんが肉を食はず女を近付けず爾うして唱へる御教は佛様が
聞いて成心をし形ちは坊主でも肉に喰ひ妻を愛し只の人に異りの
ないのが唱へる念佛は坊さんの唱へる念佛とは佛様が聞いて嬉し
くあるまいといふのは最も千万でございませぬ然らば其の有難
みが何の位ゐ違つて居ると聞いた並のものならば此の返答には差
支へますか親鸞聖人のお師匠さんといはれる法然上人であるか
ら更に驚ろさせん榮爾笑つて法然上人のお疑がひは御最と
も千万でござる然し出家の唱へる念佛も在家の唱へる念佛も功
徳に於ては些さかも異りはございませぬ其の御不審は御無用で
ござるといふと關白兼實公が暫し頭を垂れてお考がへなさいま
した九條「イヤ上人の言葉疑がふのではございませぬが女を
近づけず不淨の物を食せず身を護しひ清僧の唱へる念佛なれば

親鸞聖人御一代記

自づから徳功も深かるべし又吾の如く朝夕妻子の愛に絆され酒
肉の如き物も嫌むところなく食し不淨の口から唱へる念佛は必ら
ず清僧の唱へる念佛とは功徳も劣る道理である然るを勝り劣り
もなく甲乙もないといふては何分麻呂には分り兼ねる願はくば何
ういふ譯で勝り劣りのなきかを知らせて貰ひ度ものでござる時
に上人膝を進ませられまして法イヤ御不審御最もの至りで
ござる身に酒又は肉を近づけず女子を遠ざけ行なひを正しくし
て念佛を唱へるは己れの身を謹しんで已れ獨り成佛得脱をしや
うといふ即ち自ら勤めるといふので自力門の教へ即ち心
であります今拙僧の申す肉食妻帯の在家の念佛は誰にでも出来
る易き行なひで之を他力淨土門といふ抑も之は十方衆生と誓ひ
て出家在家の隔てなく一切善惡凡夫得生と譯して諸々の善も惡
ひも凡夫も安樂の淨土に生を得るといふ決して肉を食はず妻を

親鸞聖人御一代記

持すうれで念佛を唱へなければ成佛得脱はせんといふのでは
ざらん凡る念佛に於ては凡夫も利公も馬鹿も更に差別はない彼
は利公であるから利益を與へ是は馬鹿であるから利益を與へん
又凡夫であるから利益を與へず優れた衆い人であるから利益を
與へるといふソナ佛が撰好みとされた節には生きとし生ける
者は甚はだ迷惑をいたす佛は奉行ではござらんから善人だから
賞める悪人だから悪くするといふのではなから佛に依怙愛願があ
られては迷惑千萬な話してはござらんか其の故は阿彌陀如來の
思召しは本爲凡夫兼爲聖人と御契約を遊ばした之を碎ひていふ
と元念佛といふものは凡夫の爲めにして傍はら聖人の爲めには
然らば悪人を助けるのが肝心な法で智者善人を助けるのは二
の次ぎであるうれ故出家は暫らく差し置き先づ在家の凡夫智慧
のない男女を救ひ給はんとすの御誓ひである然らば肉食妻帯の念

記代一御人聖鸞親

佛と坊主の唱へる念佛と決して區別はござらん能く御考がへ遊ばせと水晶の念珠をつまぐりながら仰せられた中々南鶴共のいふのとは違ひまして門跡様の本尊阿彌陀様に坐つて居る法然上人のいふことだから分るやうに意味深長に説れまし

記代一御人聖鸞親

佛往生の法には男女の區別がなく凡夫も出家も賢愚も決して隔てなく佛になれるといふことを末世の人に示したく存する故何卒此の儀を聞き入れてもらひ度といはれました今迄は口で佛になれると能く約束をしたのだが今度は證據をもつて人に示さん

親鸞聖人御一代記

依て其方を殿下に参らせり間だ今日より仰せに隨がひ姫君を妻
室といはれし末世の衆生の惑ひを解き妻帯の宗門を弘められし
といはれられたる思ひ寄らざる一言に善信坊は頭を垂れてバラ
と浴涙に及ばれる之を見て居たスベテ坊主もが ○何うだ再
然坊御覽なさい善信坊が有難涙だにくれて居る 再左様でござ
る運のいゝ奴があるもんで九條様の婿になるとは正かに阿彌陀
様でも御存じでございますまい私くしは最早坊主は厭になりまし
た此の再然坊腹を立て京都を立出で江戸の淺草奥山に参つて
ヤートコセの郡に入り俗の時の名を名乗つて梅坊主といふ……
是は當にはなりませぬ時に善信坊頭を上げ 善師命を背くは恐
れ入り候へども吾幼くして父母に別れ叔父範綱の元に學問を
いたし九才の春慈和尙の門に入り多年の望み達して此處に出
家の數に入り尙ほ比叡山に登り學に身を委ぬること廿年然るに

親鸞聖人御一代記

又天登宗の門を脱れ今一向専修の世すて人となりましたことは
師も御存じでございませう尤も今日まで片時も肉食妻帯は勿
論佛の戒しめを犯したことはございませぬ然るに數多のお弟子
の中より已れ一人撰み出され出家として守るべき戒しめをすて
ヨとは彌陀の利益にも洩れ我が師にも棄てられたるか残念至極
に存じますると墨染の御袖を絞るばかりに歎きました此の時上
人宣はく 法殿下の御所望此の源空が勸めをも辞退いたし出家
の謹しみを堅固になさんとは是れ至極の道理なり然しながら四
月五日の夜六角堂に於て夢中に行者宿報説女犯の御告げあつた
を如何考がへられるやと尋ねられましてハツと善信坊が驚ろき
ました 善如何して我が師には此のことを御存じで入らせられ
る 法イヤ其不審尤も拙僧にも其の夜觀世音菩薩御身がお告
げを蒙むつたるが如く感得いたしたさらくと白紙へ認ためて

記代一御人聖鸞親

差し出すのを見ると自分のお告げと少しも違ひませぬ居並ぶ人
違何れも不思議に思ひました世に善信坊が詞ばを改ため善観
世音菩薩のれ告げといひ且は師の仰せといひ謹しんで承知仕
つる法より承知といはれるか善如何にも謹しんで承知い
たしてござる假令人あつて善心は破戒無慙の悪僧であるとの誹
りを受くるとも末世衆生濟度の爲めならんには何をか厭ひ申す
べきと返答をいたしました關白殿下もお喜び遊ばされ九條何
事も衆生濟度の爲めならば恨むことなかれと仰せられ是れから
善信坊と同じ車に召され五條西の洞院なる別殿に入らせられま
した時は是れ建仁三年癸亥十月五日信善坊御年三十一才即ち
九條殿の御息女今年十八才にならせられる玉姫君と御夫婦にお
な遊ばした程なく御男子御誕生あつて御名を範実と名付け奉
まつるされども此の御子様は御早遊遊ばして第二は女子で之

記代一御人聖鸞親

おぐろの方といふ第三を慈信坊善鸞といふ第四を信遊坊明信と
いひ第五を有房入道道性第六が高野の禪尼で第七が女子で左衛
門督の御局彌女後に覺信禪尼と申し奉まつる偕て九條關白兼實
公は凡夫往生の証據を見せん爲め御寵愛の御姫君を只一人の善
信坊といふ者に遺はし法然上人は彌陀の利益を末世に知らせん
爲め第一の門弟たる善信坊をして在家往生の証據にいたしまし
た善信坊は好まざる肉食妻帯をして弘く凡夫に阿彌陀の利益を
知らせる實に申すも愚かなことございませぬが末世の今日祖師
と仰がれる方々は恐れ入つた行狀があるものでございませぬ
糺さんと欲せば己れの身を直はせよで一家を治めて奉公人や妻
や子に勉強をさせやうと思つたならば先づ己の身から正さなけ
ればならぬ一國を治めんと欲せば政府のお役人が正しくして
人民に見せなければならぬ此の宗旨を弘めんとするには自分

記代一御人聖鸞親

が先に苦勞をしなければなりません然るに是が却つて仇となつて親鸞聖人越後へ御流罪になるといふ一席は次席に申し上まする……

七十

第五席

偕て六角堂に於て去ぬる四月五日お告げに行者宿報設女犯我成玉女身被犯とあつたが今九條公の姫君で玉姫君といふ實に思ひあたることのみでございます是から善信坊が元久二年三十三才にならせられましたして都近き岡崎村に庵室を構へるれにお在で遊ばし御修行をなさいました後年聖人と共に此の宗門を弘めましに依て坊さんのれ弟子ばかりが三百八十余人出来た其の他在家の男女は擧て數ふるに遠まわらず然し皆な自力と名付けて自分が一生涯懸命に信心をして自分さへ佛になれはいといふ風で

記代一御人聖鸞親

人を助けるといふことが少くない元來此の御宗旨に行なひ易く入り易くして多くの人を助けるといふのが目的でございます或時善信坊吉水の法然上人の處ろへ參つてお話しに善兼て他の教へをさし置き難行を脱れて行なひ易き當宗門に入つてより此の方師の教へに依つて些さか念佛往生の法は辨まへました然るに同宗門の内居る多くの出家は皆諸宗より出て當宗門に歸依したものであつて兎角真どの法といふものを知らん只信心をするのみでは已れ一人ばかりで他を救ふといふことが出来ません私くしども貴下の思召しに叶ふか叶はんか其の程は分らない元より佛の道は安心を得るを以て第一といいたす依てお弟子方集の砌りに此のことをいひ出し各々の思ひの安心を試し私くしの思ふ處もれ話しいたし度と思ひますが如何なものでございます法イヤ尤ともなことである斯く多き信者の中で此の宗

七十一

親鸞聖人御一代記

旨の極意を辨まへ居るものは四五人しかあるまい何は兎もあれ
明日各々參集の折柄申し出さるべしと御許しになりましたから
密かに其の用意をいたして置きませす時に元久の二年九月の廿一
日のことで何時にかはらず三百八十余人が參集をいたしました
然るに書院の結構常に異りました先づ中央と左右と三つの坐を
分ち左り右の坐には信不退の坐行不退の坐と墨黒々と記したる
札が貼てあります其の中央の坐には法然上人が着坐をして居る
次の坐には善信坊緯空……之は親鸞聖人でございませす此の方が
硯に筆を置き前に白紙を延て控へて居る來た者が驚ろひた今迄
にコンナことはない何うしたのだらふと一同顔を見合はして居
ると善信坊が善アイヤ方々斯く坐席を設けられしことはさ
かし御不審に思ふでもござらふ然し之は上人の思召しにて平常
上人より教へを承たまはり如何悟られたか其の信心の趣むきを

親鸞聖人御一代記

試さん爲り斯く今日は坐を設けられました信行の兩坐とも面々
のれ心に任せ着坐あつて然るべしと申し渡しました來た坊さん
三百八十余人が聞きは聞いたが何のことだから分らない信不退
と書てある處ろへ行不退と書てある處ろと二ッおは信不退だか
ら信じて退すかざる處ろ行不退だから行なつて退すかざる處ろ
借て何うしたもんだらふと只茫然と見て居ります善信坊面倒と
や思ひけん善さうお考がへあつては何時武待ても席が定まら
ん何れへなりとも御着坐あられよ決して遠慮には及ばんといひ
渡しましたッア之を聞て饒西の聖光坊白川の法蓮坊の二人がッ
サく行不退の坐に着た他の者が之を見て彼の二人は名代な
學者だから其の二人が行不退の坐に着たのであるから吾も
ど其の方へ堅まつてしまふ一方へかたまつて一方が空て居る其
の心は聖覺法印法蓮坊信空のみが信不退の坐に着きました一々

記代一御人聖鸞親

それを帳に記した時に庭の方から参りましたのが前名熊谷の次郎直實入道して蓮生坊でございます庭の所より之を見て不審に思ひ天地に響く大音を上げた蓮是は蓮生坊にて候何時も早朝より参る拙者が斯く遅刻いたしたる段今日は已み難き用ありて遅参の條無念に存するといひながらあはたしく木履に笠を抜ぎすてやがて板橋に上り蓮善信坊何事の候や承たまはりたし善實は師の思召す處ろあつて信行の兩坐を分ち各々悟らるる處ろを試してこゝろみんどの結構でござる御坊にも何れの坐になりとも着れ給ひといはれて蓮生坊が蓮信は左様でござつたか何事の出来いたしたるやと一時は驚ろさました余人は兎もあれ蓮生に於ては信の坐より他に着くべからずと突然信不退の坐に着させたまし蓮アイヤ善信坊拙者の名前を信不退の坐に記し玉ひ善委細心得たりと帳面に記る時に法然上人法善信坊

記代一御人聖鸞親

其方は何れの坐に着れるか善拙僧は信の坐でござると信不退の坐に着れました法然上人左右を見給ひ法各々決心をして今若れたる坐こそ如何なることありとも退りかざる悟りと覺れたり左様であるかと問ひましたと信の坐に人々は仰せ迄もございませんと速やかにお答へをした行の坐に居たものは之も左様でございますといつたが少しく不安心の点を現はしました時に法然上人ズバと立上り法吾も坐を定だむべしと信不退の坐に着れました此の節善信坊筆を取つて信不退の坐師聖人と記す教師の定まつた席だから信不退の坐に坐すのが眞正である行不退の坐は落弟でございます之は何ういふ譯だといふと抑々信不退行不退といふは信心をもつて不退位に叶ふや行を以て不退位に叶ふやといふことで不退とは退りかす即ち正に之を定めたる佛臭くいへば正定といふことでございます之はお經の中に信心觀喜

記代一御人聖鸞親

乃至一念 則得往生住不退轉とあります只念佛を尊とび無二の
信心をして極樂往生をすると思得たのが心不退であつて又晝夜
唱へる念佛の力に依つて往生をすると思ふ行不退でございます
此の二ツの區別は是れで明瞭に分つて居ります念佛を尊とむと
其の方に依つて成佛をするのとは獨立と人に引立てられるとの
區別がある法然上人が仰せられたは信不退の坐には聖覺信空蓮
生善信と吾と五人であつて跡は未だ信の悟りは得ないといはれ
ました名々始めて兩坐を分たれたことを考がへました赤面をい
たしました然し是が却つて爲になりまして一生懸命に皆々信心
をいたします是より此の宗門が盛んに相成り遂に比叡山と南
都の坊主さん達の憎しみを受け念佛停止の御沙汰より親鸞上人
が流罪になるといふ大事が起りました昔時より宗教を弘める祖
師は一度はケ様な危難に逢ふものでございます耶蘇は磔刑に相

記代一御人聖鸞親

成り日蓮上人は左渡へ流され又は龍の口に於て斬罪にならんと
したことがあり只一生危うき目に逢はないのは真言の祖師空海
即ち弘法大師でございます然し空海は紀州熊野浦の出生で比
叡山へ登つて佛學を研究をして廿一で只獨り只今の支那昔の
唐へ参りました其の後傳教大師こと行基が勅命に依つて真言秘
密の教を得ん爲め入唐をしたが言葉が通りません筆談ばかりで
は不自由だソコで通辨を得たいと思つたが只今ならば日本人も
支那には澤山往つて居ます其時分さうは居りませんうれに此
の通辨は普通の通辨と違つてお教の文句を能く知つて居なけれ
ばならないうれが爲めに雇ふのに甚はだ不都合でございます處
ろへ空海がノソく出て来て私くしが通辨をしませうといつて之
れが通譯關になりました一緒に日本へ歸つて来て行基は比叡山
を開き弘法は紀州の高野山を開きました天の時比叡山の理に如す

親鸞聖人御一代記

といふことがあつた人間が幾何利源でも處るが惡くつては出世が
出來ないうれ故空海事弘法様は紀州高野山を開く彼方に往つた
お方は御案内でございませすが高野山ばかりは町人の石塔も大名
もお公卿様も皆同じやうに一ツ處るにかたまつて居て少しも尊
とひも卑しひも區別がございませせん佛の教へは位があるから
佛になれる位がないから佛になれないといふソナナ不自由なも
のではございませせん四民同權誰でも佛になれるが眞の教へで
さいまするれに就て弘法様は大層な人で日本國中此の人の歩行
かない處ろはございませせん實に弘法歩行人で之は諸所あるひ
たといふ洒落で……其の弘法様と唐土で艱難をした傳教大師で
之は天台宗でございませす比叡山は天台宗を主としてある朝題目
に夕念佛朝は南無妙法蓮華經夕へは南無阿彌陀佛之が天台宗で
ございませす然し中々難行を遂げ苦行を積なければ佛になること

親鸞聖人御一代記

は難ひ自分一人艱難をし佛になつても宜いが人を助けるのが
出家の役何うか斯ういふことでなくのり賣婆アさんも羅宇居ま
せるを横町の熊も八公も別に骨を折らずに直ぐに佛にして遣り
度いといふ思召しがあつて此處で法然上人に歸依した親鸞上人
が念佛を以て成佛得脱するやう骨を折つたのでございませす此の
法然上人に仕へて居るお弟子も數多ありませすが親鸞上人を別と
して聖信坊湛空勢觀坊源智念佛坊念阿杯といふは皆高名な弟子
でございませして就中湛空といふは徳大事左大臣實能公の孫法眼
圓實の直門弟で大納言律師公全とて密宗の方僧でございませした
が夫れを棄て、法然上人のお弟子となりませした念佛に歸依いた
しまして聖觀坊源智は清淨華の開基にして俗の名は備中守師盛
の御子師盛は小松内大臣重盛公のお子様であれば正しく其の孫
でございませす建久の初め十三才にして法然上人のお弟子となり

親鸞聖人御一代記

十八ヶ年の間常にお傍に從がつて上人滅後一教起請といふものを書したのも此人のお願ひであつたさうです門徒の方で親鸞上人の一教起請といふとダイヤモンドより尊とひもので人々が大切をいたして居ります念佛坊といふは天台宗の坊さんであつたが中頭念佛の行者となつて法然上人のお弟子になりましたが果して念佛を以て成佛が出来たものかと上人滅後まで疑がひを生じて居りました然るに或夜の夢に法然上人虚空に現はれ給ひ彼佛今現在世成佛といへば勸むるがし衆生稱念必得往生何に疑がひがあるといはれて夢が覺めました茲で發明をして愈信々心深く此の人は後に嵯峨の奥へ這入り往生院といふ寺に入つて彼逝去になりました彼佛今現在世府佛といふは彼の佛様が……彼佛は阿彌陀なり此の世に現はれて在家の者でも佛になれるやうにする在家とは坊さんでない只の人のこと衆生稱念必脱往生

親鸞聖人御一代記

之は衆生といふから諸々の生たもの人間には限りません虫でも鳥でも魚でも阿彌陀様の南無阿彌陀佛を唱へ又は之を思へば必ら往生することが出来るといふ人間は南無阿彌陀佛といへるが鳥や虫は南無阿彌陀佛はいへない然らば何うしてお念佛を唱へるといふと困るソコは佛様もぬかりがないから衆生稱念と説た稱といふ字は唱へること念といふ字は思ふといふ字只思ふといふ字のは思の字を書く彼處に來たのは源兵衛さんじゃアないかと思ふのは思の字ア一錢が儲けたい何うしたら儲かるだらふと考へるのが念の字鳥や虫はお念佛は唱へられないから深く思へば成佛をする即ち信心の深いことを申ししたものです能く彼處の婆アも往生をしたといふが往生が出来れば豪氣なものです往生の往の字は往といふ字之を分拆ていふと苦の婆を去つて安樂の淨土に生れるのが往生婆ア

親鸞聖人御一代記

さんが嫁をいびり夫婦ぎん若ばかりふくらがすを目的として居る婆アさんが死んだとて何に安樂の淨土に生れかはるものかさういふものが死んだのは死ばつたといふ之は余計なことだが鳥渡因みに依つて申し上げて置きます時に元久三年改元あつて建永元年丙寅八月十六日祖師親鸞聖人の善信坊緯空何時の如く法然上人のれ住居吉水に参りました此の時に聖信坊湛空聖觀坊源智念佛坊念阿参られまして四方山のれ話しの後に念佛坊が人々に向ひまして念倍て各々様なことを申すと異なることと思召しもござらふが何卒安樂の淨土に生れんと往生を願へども凡夫の信心は誠と少なし何時かは師の上人の如き真とを得て應ばかりなく往生を遂げられませうと申しました此時に一坐の人々成程尤もなことで之に同意を表す時に善信坊進み出で善イヤ一應は御尤ももござるが私くしは其うは思ひません念うれ

親鸞聖人御一代記

は又如何なる仔細でござる善左様衆々師匠の教へを承たまはるに信心に於ては師匠の信心もかはる處ろはないと考へますと言葉が切れると聖觀坊源智進み出でまして聖哲らく善信御坊ね扣へなさい只今承たまはるに師の信心も貴僧の信心も變りがないとは何事でござる師匠は大學者且は大才殊に念佛の開祖淨土宗の大師ともいつべき方貴僧は其の門弟の而も末座にあるもの其の者と師匠の信心と變りがないといふことは些と高慢ではござらんかと議論を仕掛けました之を例へていふと大僧正の様な有難ひ坊さんの信心と並の坊主の信心とは違ふだらふといふのです時に善信笑を含み善イヤ貴僧の仰せ御尤ももだが全たく私くしは同じこと考へる聖之は面白い何ういふ譯だか承たまはりたい善左様抑も上人は智慧深くして何れの經文を御説にならんといふことはなく其徳菩薩に等しきお方である

記代一御人聖鸞親

が私くしは元より不學短才にして逆も上人には及びません又徳
の高きも上人にあつて之も又私くしと同一にはならん然し往生
をいたす信心にいたては決して變りはありません又い結局阿彌陀
様の仰せを守り居るのは同じことである殊に阿彌陀如來の仰せ
に抑も之は本爲凡夫兼爲聖人とお誓ひなされた利濟な人より馬
鹿な者を助けるのが阿彌陀様のお願ひであるから上人の様な博
學大才な人より私くしの方が阿彌陀様の御心に叶つて居る然ら
ば其の叶つて居るものが信心をするのに何んの變りがございま
せうと申しました一同之に一言もない處へお立山になつたは
法然上人即ち源空でございませす人々に向はれまして法如何
に方々凡る信心に於て差別のあると申すことは自分が勤め考が
へる時の信心であつて智慧が深ければ自づから信心も深い其の
故は自分の氣力を勵ますが故に自然と信心に深い深い別があ

記代一御人聖鸞親

る此の方が勤むる處の信心は阿彌陀如來の仰せを受けるので
あるから智慧も分別も入らん阿彌陀の方より賜はつたる信心で
あれば各々が信心も吾の信心も變りがない此方から考へた信
心ではない向ふから斯ういふ信心をしると思ひ出して置たのだ
からそれさへ信心をすれば何んでもない若し利濟馬鹿に依つて
信心が異なり利益に厚い薄いがあると思つたならば逆も吾の參
るべき極樂淨土へは參られん即ちさう考へる人は迷つて居
るのだ他の宗門は自から勤めて迷ひを晴す此の念佛は向ふから
迷ひを晴してくれ然らば何うしたら迷ひが晴れると思ふのが
抑も迷ひだ然らば何事も心に抱かず一向南無阿彌陀佛と唱へて
阿彌陀如來を信するがよろしに向ふから迷ひを晴してくれるの
に此方で何うしたら迷ひが晴れるだらふと考へるは馬鹿々々
しひ話してはないかといはれましたので一同一言もございませ

ん宗旨の中でこんなものなきな樂な宗旨はない吾々の様な晴惠の
ない人間には最上でございます何うしたら迷ひが晴れるといつ
て苦勞する暇も費やさず只阿彌陀様を祈つて居れば陀度成佛を
する然し愛想をつかさねないようには太いことさへしなれば宜
しい悪人でも救ふといふのだから況んや善人なら尙更阿彌陀様
が助けませう夫れに肉食妻帯決して坊さんでも肉を喰ふなとい
ふのではない男女の交まりをして子をこしらへべき器械があり
ながら夫を用ひないのは人間として誤まつて居る又肉も喰へる
齒を持って居ながら肉を喰はんといふも間違つて居るソレな不自
由なものならば始めからさういふ物をつけて置かなければ宜い
さういう野暮なことをいはないで女房もお持ちなさい肉も喰べ
る阿彌陀を祈れば何ふから迷いを晴して極樂往生をさしてやる
といふ文明開化の今日には適當した宗旨でございますサア諸宗

第六席

から此念佛に歸依するもの夥多しく實に願が甘きに若く如きで
ございます圖らず諸宗の憎む處となつて法然上人に善信坊いよ
御流刑になるのお話してございます次席に申し上げます
る……
倍て建永が三年に改元あつて丁卯祖師親鸞聖人の善信坊綽空御
年三十五歳で御流刑の勅宣を蒙りられました抑も此の元を尋
ねると善信坊の綽空並びに法然上人の源空永安の頃より此の方
吉水に於て念佛往生を諸人に勧めました之れが爲めに盛んに相
成り上は一天の君を始め奉まつり下は民間の賤の男女に至るま
で念佛三昧に入られました且は天台眞言の碩學高僧も年來の宗
旨をすて此の宗旨に歸依致たしまして其の繁昌旭日の上るが如

記代一御人聖鸞親

く然し下世話に船頭多くして船山に上げるといふことがある親
鸞聖人に法然上人は別に他宗を悪くはいひませんが跡の坊さん
達が念佛ばかり賞めて他宗を悪くいふ勿論后年日蓮上人といふ
法華宗の坊さんが出まして鎌倉の大いに立て念佛無間禪天魔眞
言亡國律國賊法華一人の成佛と唱へ立てた日蓮のいう處ろを聞
くと念佛を唱へると無間地獄に落ちる禪宗は天魔に魅れたような
もの眞言亡國といふからオンガホキヤアペーロシヤと唱へる
と國を亡ぼす尤ともペーロシヤにあると國を亡ぼさんまでも家
位ぬは亡す律國賊といふから律宗は國賊である怒鳴つた尤も
之は原因のあることで其の時分は鎌倉の北條時頼から時宗の時
代だ天下は先づ泰平で時頼といふ人は坊さんになつて禪家を信
心をいたした爲に坊主が幅を利かして堂を建るとか何をする
かいつて無暗に錢を集めるうれを日蓮が罵つたのでございま

記代一御人聖鸞親

す尤とも法華經は釋伽が一番終いに説たお經で大層むづかしひ
佛の教へといふものは妙すもので早くいふと茲に扇がある此の
扇は何んで拵らへたものだらふ竹と紙で拵らへたものだと向ふ
が得心がゆくとイヤさうではない竹と紙では出来な要めとい
つて之に鉄がある成程うれでは紙と竹と鉄で拵らへたものだと
いふとイヤさうでない何んにもないものだと一番終ひに説くサ
ア聞くものが驚ろく何故何んにもないものだといふ此の紙とい
ふものは元來何んだ木から製したものの其の木は元來何んだ木は
木だ木は木では分らない誰が植たのだから誰が植たか分らな
い然らばない處ろへヒヨツコリ出来たのだから有るものよりな
いもの方が先だ有る處ろへないもの出来やう譯がない然らば紙
と竹と鉄と此の三ツ因縁が集まつて始めて扇が出来た竹と鉄と
紙の三ツを取れば何んにもない只三ツが有つたばかりで扇にな

記代一御人聖鸞親

つたど一ノ段々説てゆくのが佛教の佛教たる處ろでございます
其の一番終ひに釋伽が説たのダ法華經うれを日蓮上人が賣り物
にしたのでございます親鸞上人は他力本願といつて阿彌陀様の
眞の願ひは惡人でも善人でも仮令虫でも鳥でも念佛を唱へ思ひ
すれば成佛が出来るぞ教へた實に有難ひ教へてございます借て
只今も申し上げた通り門弟共が八方で念佛を賣めて他宗を惡く
いふ阿彌陀様より尊とひものはない他の佛が入るものか神さま
が入るものかと恐くいふ今の耶蘇教が先祖異代の佛檀を破砕さ
してキリストの畫像を掲げるやうなもので熱心の余り議論が極
端に走る之が爲めに南都北嶺の太衆南都とは奈良北嶺とは北の
寺太衆とは多くの坊さんのことうれに教比山の坊主が團子汁の
熱立つたやうに騒動を始めた ○サア念佛の奴等を捨て置けな
い自分の方ばかり賣めて吾々の宗旨を芥たの如く馬しる第一善

記代一御人聖鸞親

信坊といふものは元慈鎮和尚の弟子で天台宗から出た坊主だ天
台宗は我が比叡山の本宗抑も佛の道を天台宗で學んで淨土門
に入り念佛に限るとは庇を貸して母家を取れたやうなもの何ん
と再念坊の前だがすて置けないではないか ○左様く出店の
分際として本家を罵しるは不都合千万此の儘にはすて置けない
と相談して山徒の人々集まり八方に人を出し其上にも集會をす
る一同の坊さんゾロく比叡山へ遣つて来る ○今度の一條に
聞きでござるか ○聞たろく と聞たか坊主が澤山出て来た借
て此の多くの坊主の内にも西塔但馬の堅教浴秀に東塔の祐覺等
申し合はせまして法然上人並びに門弟等死刑と流罪に處せられ
るやう奏問を遂げやうと相談をいたしましたソコデ比叡山の坐
主見眞大僧正へ此のことを訴たへ出でました見眞大僧正が比叡
山總取締りでございます見眞大師と稱される博學の御名僧で

記代一御人聖鸞親

さいます僧正之を聞れて見られは源空は全たく邪道を勤める
人ではない其の取沙汰を察するに門弟どもの過失から出でたる
ことであらふ万事は此の方に任せ置けと一同を慰さめ御使ひを
法然上人事源空の元へお遣はしになりました法然上人早速對面
をいたすと彼の者威儀を正して曰く○此度念佛一宗建立に依
つて自から之を勝ると稱し他を損なふ旨取沙汰あるの條驕慢の
聞ぬなきにしもあらずさるに依つて比叡山山徒の怒りおびたい
しく果して左る御存意のあることか伺がひたふござる時に然法
上人形ちを正し法恐れ入つたるね年來門弟の邪見を戒し
め居りまするがはしたなく左様なことを申し觸し甚はだ叡山の
お怒りに觸れ何んども申し上げやうもございません是れ皆私く
しの示しの届かざる處ろ以後は門弟の邪見を改めたる爲め起請
文を奉まつらんと之れから八十余人の高弟に連判をさして七ヶ

記代一御人聖鸞親

條の禁戒を記し元久元年十一月七日九條關白兼實公のお手紙に
添へて比叡山の坊主へ送りました之が爲めに叡山の怒りは些さ
か解けたが奈良が承知しない遂に死罪流刑のことを奏問を遂げ
ました茲に於て十二月廿九日宣旨を下さる其の趣むきは年頃源
空上人々々に念佛を勤め之に依つて貴錢之に歸依する者多し然
るに彼の門人等に邪見の徒あつて一向専念の要文はことよせ戒
しめを破却す戒しめを破却とは肉食妻帯のこと之れ即ち門人
の邪見にして上人が本懐にはあらざるべしありと雖も其の
罪なきにしもあらずどの御沙汰でございませす源空上人大きに驚
るささういふことは決してございませんと起證文を書て奉まつ
る爲めに些さか奈良興福寺の訴たへも穏やかになりましたけれ
ども吾の宗旨より他に尊とひ宗旨はないと思つて居る坊さんが
未だ憤をほりやます學者と相談して朝廷へ曉奏をしやうと考が

親鸞聖人御一代記

へて居た然し大分念佛の方も穩やかになりましたるれが爲めに
訴たへることが出来ない何んかあればと待つて居ると出来た
後鳥羽の院太上天皇とやらせ給ひて後紀州熊野山に御臨幸まし
たことがございます建永の元年冬の頃と聞へました此の時
思ひ寄らざる過まらが出来たのは去る頃法然の源空上人即ち
親鸞聖人の師匠さん此の方が清水寺に於て出家功德經といふ
お經を講釋をなさいました時に太上天皇様の御寵妃に鈴虫の
局松虫の局とて一人が十七一人が十九日毎に之へ参つてお講釋
を聴聞をして居られました何が何んとなく世の中を味氣なく思ひ
出家遁世のことを思ひ立てました然るに其の頃法然上人のお弟
子で住蓮坊に安樂坊といふ二人が東山の鹿ヶ谷の精舎に住して
念佛を頻りに唱へて居りました其の節前に申し上げた太上天
皇が熊野へ御臨幸遊ばした折を幸はひ二人の者が此の寺に参り

親鸞聖人御一代記

まして ○妾は御所勤めをいたすものであるが出家遁世の望み
深く何卒髪を剃し墨染の衣を着て多くの人を助け度何卒此の儀
を承知して出家遂げさせてくれる様に頼みました二人の坊さん
驚ろひた恐れ多くも太上天皇御寵愛の兩人志るさしは感すべ
きことであるが出家にさしては御所に濟まんソコぞ安樂坊が
安イヤ御兩所のお願ひ御尤もながら抑も此の念佛の宗旨は在
家出家の區別なく南無阿彌陀佛と唱へれば成佛をいたすので
ある決して出家遁世には及ばんと申しますと鈴虫の局が鈴然
らば貴僧は何故に御出家をお遂げ遊ばしました安是は多くの
人を救はん爲め出家をいたした鈴るれならば私くし違二人も
人を助ける爲めでございますから是非出家にいたしてお貰ひ申
したい安イヤ他の人ならば承知をしませうが宮仕へをなさる
各々後難が恐ろしふございますから此の儀はお断はり申す鈴

親鸞聖人御一代記

御承諾がございませぬければ妻くしたち二人は水に投じて死す
る恩悟でございませぬ斯ういはれてもならんといへば
命ちをすてる據どころなく然らばお望みに従がひませうと縁り
の黒髪を切り綾錦を脱ぎ替へて麻の衣を纏はしめ佛門に入れま
したから彼の二人は紀州へ参りまして草庵を結び念佛三昧に行
なひすまじやした然るに太上天皇熊野より還御ましく此の
ことを承たまはり大ひに逆鱗ましく奏達をも遂けず委くしに
法林となる條上を欺むくの條免かるべからずとの御沙汰でござ
います公卿方が御評議をして女子であるに依り暫らくの間は御
猶豫を願ひます然し如何に二人が願ひにもせよ剃髪をいたすと
は念佛の坊主とも怪しからんことであると怒られると是へ付け
込んで比叡山と奈良の坊さん達が色々のことを訴たへ出した此
の儀お用以之れなきに於ては山王の神興春日の神を振り奉まつ

親鸞聖人御一代記

らんこの勢はひでございませぬ比叡山の坊主と奈良の坊さんは度々
戦かひをして中々強ひ其の戦かひの度に戦は勝利を紀念の爲め
山王の神興春日の神を振つたものでございませぬ又御公卿方
が評議をしたことは小さいが今此の乱れたる時といひ殊に比叡
山の僧興福寺の悪僧等勢はひ盛んにして何かあらば天下に寇を
なさん景色が見へるコいふ折であるから暫らく彼等の怒り
を解かんと御相談あつて都を初め日本國中津々浦々に至るまで
彌陀の名号を唱ふることを高聲にては叶ふべからずと堅く御停止
になりました實に南無阿彌陀佛停止の御沙汰である迂濶に熱ひ
湯にも這入れない之は熱い南無阿彌陀佛……直ぐ裁判所へ送ら
れて相當の罰を受けねばならぬ不自由千万でございませぬ之が爲
めに法然上人は小松谷の寺に引籠り御説法のこともなく一門の
人たちの参詣も禁じ謹んで居られました住進坊に安樂坊の二

人は今御不興を蒙りつて居る身の上であるが忍びく小松谷の師匠の元に参りまして安否を尋ねて居ります或時小松谷を立出で夜分のことでありました五條の御所の横手を通ると圖らず念佛停止の建札がある之を見たのが二人の災難哀れ果敢なく死刑に相成るといふ一條……

第七席

偕て住蓮坊に安樂坊の二人が其の制札を讀むと

今度南北之擬奏達御聞諸宗之依怙依人心之謀一粵源空師自文治元年頃初面與淨土門老少悉捨家業一剎法外科五十餘依之淨土念佛被禁止猶一聲停止之仍而制書如件

案朝臣

と書付けてございます住蓮安樂の二人は之を讀み終りまして呆

れはて吾を忘れて聲高く住輪王位の高けれども七寶久しく止まらず天上樂しみ多しと雖も五衰早く表はれたる南無阿彌陀佛くと唱へました折りしも檢非違使の役人……此の檢非違使といふものは只今の警視廳のやうなものでございます其の役人が之を聞いてバラバラと立出で○待て坊主其方は何れの者か知らんが斯様嚴重に念佛を高聲に唱へてはならんといふ建札のゝるをも省りみず禁札の前で南無阿彌陀佛と唱へるとは何事だ是れ返答をいたせと申しますと中に年老つた役人がそれを聞いて○先づ暫らく同役待つしやい此の二人は念佛を唱へたのではない此の禁札を讀んだのでそれを貴公が南無阿彌陀佛と念佛を唱へたものだとか考がへたのであらふ……坊主全く念佛を唱へたのではあるまい何かの間違ひであらふ何うだといふは助けやうといふ情けある言葉でございますと安樂坊が安イエ仰

親鸞聖人御一代記

せではございませすが確かに念佛を唱へましたに相違ございませ
ん ○コレ心得違ひを申すな念佛を唱へれば半へ入れてこと
によると死罪をも仰せ付けられるが能く考がへて口をさく殊に
は輪王位の高けれども七賢久しく止まらず天上樂しみ多けれ
も五衰早く表はれるとは上を罵しつたる一言聞さすてならん然
し全たく左様なことは申したのであるまい貴様達二人に繩を
掛けて牢舎申し付けた處ろで吾々が懸れにもならん全体貴様た
ちは何處の坊主だ 安樂坊もは東山に居りまする念佛の坊主
で安樂坊に住蓮坊と申します ○何に安樂坊に住蓮坊貴様た
二人は尊とひお方様の御寵愛を蒙りつて居る松虫鈴虫の局を
剃髪をさした大罪人既に他出をしておはならんといふお達しも用
ひず此の深更に何處へ参つた二人御意でございませす小松谷に入
らせられる師匠源空軍法然の元に参りました……一方は助けて

親鸞聖人御一代記

やらふと思つても一方は斯ういふ答へをするから助けられない
られ召捕れといふと前から一人六尺棒を携さへ安樂坊を目掛け
て打ち込んで来るヒラヲ鉢を變はして利腕を取ると肩に擔ひだ
かど見へたがヤツといふと二三間向ふへ投げつける今一人横手
から組んで取ふと大手を擴げて来るのを物々しやと安樂坊襟袷
をとらへてうれへ打ち付けられ手強ひず取逃すなど八方から
十五六人でもつて取り巻た安樂坊は念佛停止の制札を引抜き振
り上る住蓮坊は役人の一刀をも奪取り御所の築地を小楯にとつ
て身構へをなし住ヤア打手の奴郎確かに聞け只今でござ
墨染の衣に水晶の念珠を携さへ口には彌陀の稱号を唱へれども
伊勢の國の住人伊勢の次郎左衛門藤原の信國と名乗りし平遠
代の士なるが絶へて久しき打物はさの手の内見せてくれん彌陀
の利劍で生じると怒鳴りたてた之にのひ安樂坊も同じく大

親鸞聖人御一代記

音を上げ 安吾こそは後白河の院に仕へたる北面の侍にして安部
部の判官盛久なりイザ來い來れど八方に目をくばつた此の二人
とも只の坊主ではない戦さを商賣にした所謂戦さ屋であるから
斯うなると中々さくものではございませぬ捕手の役人も大變な
奴に出會したと思つたが今更だける譯にゆかないから東西南北
から打ち込んでくる棒は雨の如く殺の如く隙間もなく打てかゝ
る前後左右に二人は打ち倒し斬り倒したが中々多勢で及ぶ處
でございませんとウゝ二人とも得物を取り上げられて繩をか
けられた殺された者が三人あつて怪俄をした者が五六人ある安
樂坊に住蓮坊は死骸を見ると南無阿彌陀佛ととれ念佛を唱へ
ながら自分で殺して自分で引導を渡して居る借て一と先づ二人
を牢舎申し付けだんゝとれ取調へましたが念佛停止の制札で
もつて人を打たり威ひは刀で人を斬つたのは僧侶としてあるべ

親鸞聖人御一代記

からざることに其の上ならず此の二人は禁足の者猶更すて置けな
い二人牢に遣入つて居ながら朝百遍晚百遍お念佛を唱へる牢屋
の役人は ○さう念佛を唱へては叶ん静かにいたせと制します
が中々さかないいよゝゝお調へになると罪が重ひから先づ死罪
と極つた其の内に其年が經つて翌年の三月の中旬此の牢に新入
が來ての話しに源州上人と親鸞様の善信坊がいよゝゝ流罪にな
るといふことでございます兩人とも大きに驚るさ翌日牢屋見廻
はりの役人が参りました時に安樂坊が進み出でまして 安恐れ
ながら伺がひます ○何事だ 安師匠法然事源空此度流罪にな
るといふことでございます此の段全たくに候か伺がひます
○如何にも流罪に相成ると取極つて居る 安何時御流罪になり
ます ○確とは分らんが十八日都御發足といふことである 安
何卒師匠流罪に相成る前吾々の罪れ定めあつて然るべくお取調

記代一御人聖鸞親

らひを願ひます若命ちあれば師匠の御供をいたしたく心得ます
が恐らくは死罪でございませう何卒死罪になりませうならば明日
にも御刑罪に行なはれるやう願ひます師匠の流罪を其日に聞
ますは如何にも残念でございませう ○イヤ最とも願ひ早速申
し上げて生死何れとか御沙汰ある様にいたさう……死罪とは極
つて居るが今殺すまでも罪人には死罪の方を明かさん方が功德
でございませう翌日に相成るといふく死罪といふ宣告があつて
別當所から……之は今でいふと才判所りれから引連れられて安
樂坊は六條河原に於て八尾の秀能といふ役人が斬るといふこと
になり住蓮坊は近江の國高淵にて殺すといふことになつた此時
二人の僧から法然上人へ書面を送りました其の書面に曰く私
したちが法の爲に命ちを落すのは決して惜しからず極悪深重
力往生を遂げんと思はれ住蓮安樂を手本にすべく候と認ため

記代一御人聖鸞親

首の歌を書き添へました

極樂にまゐらんことの嬉しさに

身をば佛にまかせける哉

時に安樂坊首斬の役人に向つて 安住蓮坊と處ろを放れて死罪
になるは残念に存じますすが之はお上のお定めであるから彼是は
申しませんが住蓮坊は元禁裡北面の侍私くしを禁裡北面の武士
である何卒死骸は一ツ處ろに埋めて頂ださたいと願ひまして哀
れ首を打れました時に不思議なのは西の方に紫の雲御引き渡り
安樂坊の跡にかゝつたかと思ふと斬られた首が念佛を十遍唱へ
たと申すことでもございませう住蓮坊は打られた時に首から光りを
放ちました此の近江の國馬淵といへるは蒲生郡に御座いまして
中仙道の街道でございませう只今もつて住蓮安樂の墓は之に残つ
て居ります時に住蓮坊三十九安樂坊三十二生先き永き身体で法

親鸞聖人御一代記

の爲に命を棄てたといふ。ことわざいふ此の二人を
殺したから法然上人が驚ろひて念佛を廢めるだろふと思ふと廢
めないます。盛んに朝夕念佛を唱へて居ります。或時西山の
善恵坊が小松谷の法然上人の處へ参りまして。善かゝる御時節
でございますから朝夕のお念佛を御遠慮遊ばして都に心永くお
在で遊ばしたならば比叡山始め南都の坊主共別段此の後の立腹
もございますまい。然らば御流罪になるといふことも御取消しに
なるやも知れん。然るに誰憚からず念佛を唱へ居られると如何な
るお尤めを蒙りますか。圖り知れんことわざいふます。依て御心
の内念佛を唱へられ御口外をなさらん方がよろしかろうと存
じます。ことの落着のつくまでは淨土の御法門は先づ中止だと思
召し遊ばされるやうと言葉を盡して申し上げました。が更に法然
上人お聞き入れがございませぬ。法例へ此の舌を入裂にせられ

親鸞聖人御一代記

異國に流罪せらるゝ。とも此の念佛はやまん其故は罪なくして刑
罰に處せらるゝこと古來例し。少なからず印度の僧伽羅は後に疎
名を取り獅子國に流される。然るに觀音菩薩出現して僧伽羅を救
ひ玉ふ。唐土の一行阿闍梨は楊貴妃に浮名を立てられ果羅國に流
される。此の時九曜の星出現して雨の夜に道を照したといふ之に
依て之を思ふに此の源空罪なくして御刑罰を受けたら諸佛な
てす。玉はん夫れ今普教する所の念佛は釋伽如來の教へにして
六萬の諸佛も之を信じ其の流れをくみし源空如何なることあり
とも決して念佛を止まらんやと仰せられました。之が爲に諸御方
評定があつて違勅の罪科よんぞころなき條左遷あるべきとの御
宣旨が下りました。左遷といふことは早くいへば流罪でございま
す。上人を承たまはり。蘇かせ玉ふ色更に見へず門人へ向つて仰
せられたは。法今某しが身に取つて罪科に行はれるといふ條

親鸞聖人御一代記

は只念佛を唱へるのみであるに依て熱々思ふに阿彌陀佛本願の教は今日日本國中に弘むると雖も邊土では此の教へを聞くこともあらずらん吾配所に至りなば無智の凡夫に此の教へを説き極樂往生致させん喜こぶべきことであると仰せられました此の一言何んでもないやうだが味はひがあることとございます承元元年丁卯二月の廿八日法然上人の源空始め上足のお弟子配流の宣旨を下されました即ち僧侶を廢され姓名を改たれ俗の名を名乗つて流されたのであります坊主を廢してしまつて只の人になつて罪を受けける之は昔しも今も變りません華族が思ひことをすれば華族を取り上げ只の人として宣告をされると同じことソコデ法然上人は藤井元秀と名号けられる流される先は土佐の國幡又夫れに引續ひて流される者八人淨聞坊は備後の國禪光坊は伯耆の國好登坊は伊豆の國法本坊は佐渡成登坊は阿波の國善

親鸞聖人御一代記

信坊は越後國善惠坊は無動寺の前の大僧正之を預かりました中にも親鸞聖人の善信坊は法然上人のお弟子中一番の末座で殊にお年も若ふをございます然し學問は衆に越えて中々驚いれ方であるから従がつて比叡山は奈良の坊主にも憎まれ方が強ひ彼を生して置く念佛を弘めて自分くの宗問に寇をする奴であるから一府殺した方がよからうといふことになつたコ、デ此のお方が殺されたならば今日門徒の盛んになることもありませうが佛様が助けられたものか茲に大職冠鎌足の末葉俊經卿の御子親經卿と申し上げる方が和漢の古實を説いて親鸞聖人の善信坊をお助け申し上げるといふ一席……

第八席

時に親經卿諸卿に申しましたは 親善信坊如何なる罪があつて

親鸞聖人御一代記

死罪に處せらるゝか彼は彌陀本願の念佛を以て衆生を濟度致す
べきもの賞すべきことはあれども罰すべき罪はない但し叡山並
びに南都の僧共に些かか遠慮せられるといへば流罪ころ然るべ
し甚はだ死刑は不承知でござると理を正して申しましたに依つ
てソコデ越後へ御流罪と極りました同年三月十三日聖人今般越
後に罷り越すに就て密かに粟田口の青蓮院慈鎮和尚の元へ罷り
越しましてお暇乞を致しました和尚涙にくれ 慈おん身の伴範
意は拙僧何よりにも育て行くはねん身の如き名僧に爲し參
らせんといはれましたソコデ翌十四日は法然上人の元へ忍びて
ね出で遊ばして御對面を遊ばし 善信も天台の門跡を棄て此
の淨土門に歸依致せしより此方七年の星霜を師の元に送り幾未
永く此の上どもれ傍に仕へまつらんと思ひしことも仇となり師
は西海の波に漂ひ玉ひ吾は北陸の雲に迷はんこと前の世如何な

親鸞聖人御一代記

る薄縁に候や夫れにつけても今別れ奉つりて又何時の世にか逢
ひ奉つらんと涙にくれ玉へば法然上人も同じく涙にむせび玉ひ
法翌日をも知れぬ老の身の再會何時と定めべきこともなく誠に
残念至極な儀でござるが仰せられ自ら茶を煮て聖人を待遇まし
たコ、デお別れを告げて立出でんと爲したる時法然上人は 法
如何に善信坊逢ふは別れの始めとはさても人生の果敢なきを能
く詠じたるものかな只何事も此の上は彌陀の淨土に逢ひ見へん
と仰せられ御涙のハラと流れて互ひに別れ兼ましたが思ひ
きつて善信坊は立歸りしました處が比叡山と奈良の坊さんが永く
法然上人を都に置くことを不平に思ひ一日も早く都を立て土佐
の國へ遣はすやう御沙汰ありたいと訴へ出でますからソコデい
よく其のことに極りました逐立ての役人周防の判官元國伊賀
の判官未定之を御使ひとして法然上人は早や御出立と聞へまし

記代一御人聖鸞親

た先づ兩使取り敢へず關白兼實公の御館に參上をして此の段を
申し上げる時に關白殿下涙にくれ二人の者に向ひまして 關汝
等に麻呂が異なることを尋ねるやうであるが法然上人は善人であ
るか抑も悪人であるか何うしやハツと二人顔を見合せました二
人御意にございませす都の人々生佛と尊敬を致すもの何んで之を
悪人と思ひませう 關然らば汝等に申し聞けるのは法然上人の
參るべき土佐の國は他人の所領であつて斯くばかりの名僧智識
を罪ある者と心得必らずつよくあたることであらふ依つて讃岐の
國中の郡は歴が領地であるからそれへ送つたらば如何なるもので
あらふといはれました之を聞いて二人が大きに驚ろきましたたが關
白殿下の仰せといひ法然上人の罪なきことは明らかであるから
二人委細心得ました土佐の國を讃岐へ替へ夫れが爲に如何なる
お尤めを蒙むるとも決して吾々は厭ひ申しますん 關流石は情

記代一御人聖鸞親

けある其方等歴も喜こばしく思ふと仰せられました早速表に如
へて居る法然上人を呼んで此のお話しを爲すつたから大層な喜
こび遊ばしましたソコで御別れを告げて愈々御出立といふこと
になるお見送りの僧侶六十有余人其他老若男女雲霞の如く御輿
について別れを惜しみました七條を西大宮へ出てうれを南に下
り鳥羽の南門より川船に召され御下向でございしました時に上人
年七十五才彼の山門の明雲僧正をば大納言の大夫藤原の松枝と
俗名をつけて淡路の國へ流しました昔しを思ひ出でられ歎かさ
る者はございません期くて同月の二十六日に讃岐國の鹽飽の庄
の地頭駿河守高橋時任入道西仁が館に寄宿遊ばして九條關白
殿下より頂戴をいたしましたお文を御覽に入れました其の文に
曰く

其國上人御下向坐 宜當奉尊養若在疎畧之所業定面須

親鸞聖人御一代記

爲後悔者也云々

右の御書面に接して他地の庄の地頭を忽がせには出来ません
洛東……洛東とは都の東といふこと「管崎の御坊より出駕でござ
います卯の一天といふから只今の午前五時出立をする法然上人
は其の日の正午に御出立でありました師匠の出てゆく跡から厭
やと仰せられて其れ故早く御出立つてございます三月の十六日
であるから夜が明けて間もない頃聖人は之も同じく坊さんの位
を取り上げられたのだから朽葉色黒筋の直衣を召され法號を改
め俗名と爲し藤井善信と名乗りました流される先は北陸道越後
の國頸城郡國府と定められる時に御年三十五才追捕非違使は
府生小槻行達……之は今でいふと警視總監のやうな人送使右衛
門の府生明兼落ち着く先は越後の國頸城の郡代萩原民部少輔年

親鸞聖人御一代記

景の元でございます九條殿下よりは玉姫の御介錯朝倉伊賀守定
直を添へて送られました九條殿下は聖人の男玉姫さまは聖人の
奥方でございます……聖人の御輿大津打出の濱より北國へ向は
せられ借て御供には性信坊蓮位坊の二人此の性信坊といふは常
州鹿島郡の人でございます大中臣の與四郎といつたもの或時紀
州熊野に参詣の序で都に参りまして親鸞聖人に隔し淨土門のお
話しを承まはり信心願に銘じまして弟子になつた者でござい
ます之れ即ち數あるお弟子の中で廿四人の内には撰まれた法恩寺
の開基でございます又蓮位坊といふ者は源頼朝四代の孫大藏の
太輔宗仲の伴源太夫判官宗茂と申しました故あつて幼年より聖
人のお弟子になりました此のことに就ては大變入金敷話しがあ
りますが近頃は講談の筋を聞てくれないで理屈にもあはぬこと
でも面白いのを最上とするからア悉しい話しは廢しませう聖

親鸞聖人御一代記

人は配所越後の國國府に越むき玉ふ越後の國に這入つて國境より國府御流刑の地まで十四里此の間だに不知親不知子といふ難所がございます同國笠嶋郡國府之れを聖人御流刑の地でございます京都より此の處まで百廿里日數十三日を経て三月廿八日萩原式部少輔年景が元に御着遊ばされました同年四月七日國分寺の御住持へ移されると此の國分寺は古多の濱といふ處から右へ七八町ばかり参りました天台宗でございます寺内に竹の内ふ處がある此處に住んでお在でなすつた後國分寺より五六町計り南に小山があつて其の山の麓に庵を結び御住居でございました今に此の地に石燈籠があつて親鸞聖人國府五年在住遺跡と彫り付けてございます處が此の萩原年景といふ者が恐ろしい邪見な人で毎日住居へ來りましては、裁是れ坊主念佛を唱へてはならん承まはるに貴様の宗旨は自から修業致さんで阿彌陀様が助

親鸞聖人御一代記

けてくれるといふ宗旨だ夫れに坊主の分際として女も愛せば肉も喰ふ不埒な奴だ肉食妻帯をして夫れで佛に仕へることが出来るかたわけめ念佛を唱へるナと殿しくいひ渡す下世話の例へにも泣く子と地頭には勝れない何うも仕方がございませぬ善哉とに恐れ入りました拙僧は別に悪事も致たしませぬが當所に流され貴下に御迷惑を掛け何んども申し上げやうもございませぬ茲申し上げやうもないといふ悪ひことを何故して参つた謹んで居れと朝晩小言をいひます時に聖人のお住居は山の麓に菘屋をしつらへ荒木の松を柱として茅を以て屋根と爲し四方は菘を以て防ぎ竹の簀に菘を敷き其のあさましを見る蔭もございませぬ風暴く吹きまします時は菘ばりの壁忽ち破れ雨刺しき時は身を置く處もございませぬ寶に其の御苦勞といふものは一と通りでな

親鸞聖人御一代記

りまして下ノくといふ音をさせる何事が始まつたかと性信坊に逓信坊の二人が越たれを上げて見ると頻りに此の家の廻りを掘て居る 逓信坊は「お前方は何を爲さる」と云ふに「此の周圍を掘るだアて居る此の坊主俺が旦那様にいひつかつて此の周圍を掘るだア逆何が爲に夫れを掘る」と云ふに「貴様たちの師匠として居る坊主は能くねエ坊主で夫れだから此處を掘つて究命をさしてやるだア夫れ掘れツといふと深サ七八尺幅三尺計りに家の周圍をグルリト掘つてしまつたさうしてうれへドク水を注ぐ是れは堪りません風が吹き入れる住居に周圍へ穴を掘て水を入れられて堪るもんではない身軀に濕氣が來まして聖人お煩らひ遊ばした弟子二人は年景のすることを情けなく思ひ恨みました何が何うも詮方がない此の上は薬を買つて聖人に吞せやうといふので逓信坊が年景の處へ参りまして 逓信は恐れ入りますすが兩三日前より師

親鸞聖人御一代記

匠病氣にかゝりまして甚はた難澁を致します善きお薬でもありましたならば頂戴を致したいものでござります 年何に病氣になつた人は病の器はといひ病氣になるのが生て居る内は當然だれ前方の宗旨は何事によらず阿彌陀様が助けてくれるといふではないか然らば阿彌陀様に助けて貰へ天下の罪人に與へる薬はない歸れ……中々取り上げません歸つて來て此のことを聖人にいふと左様かといつた限り跡はお念佛を唱へて居ります年景其の晩枕に就て寐ると眞夜中頃ミシリズシリといふ足音がする何事が始まつたかと年景が目を見すとサラ／＼唐紙を開いて次の間から這入つて來る者がある年景が見ると恐ろしい見上げるやうな大きな人で頭は髪が毛が湯を巻いて居る身が赤黒くつて青い積鼻揮をめて居る屈みながら歩引で居る身の丈凡そ一丈二三尺もあらふといふ年景が驚ろひた大變な奴が出て來た 年景

記代一御人聖鸞親

は何者だ ○俺は國分寺に居る金剛の像だ 年金剛とは仁王か
○如何にも永年國分寺の門番を致して居つたが今日は少し貴様
に話しがあつて來た年景起るといふと左りの手を延ばして二本
指で襟髪を押へヒヨイヒヨと引立てたが何にしる仁王様の力で引立
てられたから突然次の間にコロコロと顛倒つた ○此奴は弱い
奴だナ二本指でコロコロがるやうでは俺が兩の腕を出したら身
躰がつかれるだろふ年景是れへ參れ其方は當所の地頭を致して
居りながら此度都より名僧が參られたを邪見に取扱かひ家の周
圍に水を注ぎ入れて然のみならず病ひに苦しめるとは不埒千万
な奴憎んでも余りある所業だサア心を改ためて大切に取扱かへ
ヨ但し飽迄も邪見の心を抱くと今度は踏み殺すから左う思へ何
う於年景何んとかいへ 年恐れ入り奉まつる以來は謹しむでさ
さいませう ○然らば確と申しさけたが今夜は女房に留守をさ

記代一御人聖鸞親

して俺一人で出で來た今度貴様がグズグズすると女房と二人で
驚れると此の家は紛名になつて飛ぶや何にしる聖人が夜の物が
薄くつてお寒ひだらふ貴様の此の夜具を持つて往くから左様心
得るといひ捨て年景が寐て居りました夜の物を一纏めにして層
に纏ぐとノソリノソリと出てゆく余りの恐ろしさに年景が跡を見
送つて居ると一時に二間三間位ゐづゝ歩行く六尺の高垣をひと
跨ぎにして出て往つてしまふ年景驚るひて早々翌日聖人の元に
人を走らして見ると自分の夕べ着て寐た夜具をかけてお休みな
すつて居る臆を潰して直ちに藥を整へて聖人の手當をいたしま
した其晩になると又年景の處ろへミシリミシリと仁王が遣つて來て
○年景夜の物は出來たが家がアレでは悪い貴様の處へ御招待を
しろさうして貴様は只今まで聖人の居た處へ往け早くしろ年景
が驚ろひた罪人に自分の家を取られて自分が罪人の處へ食客を

する是は大變と思つたが何うも仕方がない早速翌日聖人を招待
申して手厚く世話を致しました。コ、デだん、聖人とお話しを
して見ると實に浄土門のお諭しは有難いのでございませう。始めて
年景が歸依して大層大切に取扱ひました。實に聖人は其間だど
いうもの頭の毛を延ばしてまゐるで禿のやうにしてお在で遊はし
たから自から黒禿と名乗りました。其後改めて始めて親鸞と稱
す以下親鸞聖人で申し上げます。其のつもりで御讀みの程を
願ひます。申し上げるまでもないことだが親鸞聖人の御苦心とい
ふのは一通りではございませぬ。年景親鸞聖人を國分寺の東南平
岡といふ處に家を造つて御招待をし御弟子となつて念佛三昧に
入りました。是より親鸞聖人北越を御巡廻遊ばして愚民を濟度す
るといふ一席鳥渡休息いたしまして申し上げます。

第九席

偕て九條關白兼實公の御姫君玉姫君は聖人に別れ玉ひ尤と世を
味氣なく思召され心鬱々として樂しませず。兎角御顔色も優れませ
ん。或時御父上に向はせられ玉如何に父上夫婦は二世の縁とこ
ろ承たまはりました。此の度夫善信坊御不興を蒙り雲井遙かの
越路なる國府の里に流罪の身の上都と違ひ無事朝夕御不自由で
ございませう。依て妾は是より越路に罷り越しお傍はらにて朝夕
御介抱を申し上げ度ふございませぬが如何なるものでありませうか
お尋ねになりました。兼實兵大ひに驚ろかれ兼之は怪しからん
ことをいはれる善信は勅勘の身の上天下の罪人たるべき者へ何
んでおん身を道はさるべき其の儀はゆめ、無用にいたせと仰
せられました。が姫君は中々聞き入れませぬ。玉如何はせられ父上

親鸞聖人御一代記

の仰せあるとも夫の苦しみを他所に見るとは女子の道にあるま
じきこと是非に御承知を願ひ度ふ存じます兼イヤ他のことなら
聴くが此の儀は相成らん九條關白の姫ともいはれるものが勅勘
を蒙りたる善信の元へ尋ね奉つたと申しては世の思はくも如
何此の儀は相成らん 玉然らば御父上委くしに御勘當を玉は
ますやう親子の縁を切り然して越路に参り善信に仕へたふ存じ
ます 兼子として親に勘當を願ふ不埒者其の儀はならん 玉佛
の殺へにも親子は一世夫婦は二世とござります親子より縁深き
は夫婦の中是非に此のことを聞濟みを願ひ度ふ存じますと中
々承知をいたしませんソコテ據らるごさいませんから越路に遣
りたいがさうもゆかない玉姫様の耳に口を寄せて兼實公が計略
をお示しになりました翌日から姫君御病氣といふので奥殿深く
垂籠めて在で遂ばすと七日経つと御逝去遊ばしたといふ御執

親鸞聖人御一代記

露があつて其儀御遺骸は善提所へ送られることもありました之
れ即ち計略でござりますコンナことは御存じない親鸞聖人裁
原年景の心が柔らかなりなりましたから所々を御説教を遊ばして
お歩きなさいませす翌年の四月の始め彼方此方へお出で遊ばして
越前へ来た有乳山を越へました此處は上下七里半の坂道で而も
石高道でござりますす過まつて石に跪づき爪先より血流れ出でま
したれば取敢へず
越路なる有乳の山にゆき勞れ
足も血汐にうめしばかり
夫れから跡へ引返して越前の國坂井郡細呂木の鋸坂に来る道か
に都の方を振り返り師の法然上人のことを思出し
音に聞く鋸坂にひき別れ
身のゆくさは心細呂木

親鸞聖人御一代記

是れから加賀の國へ來つて倉部川といふ處ろへ來た時に松任の
本誓寺之は天台宗でございませすが親鸞聖人の高德を聞き傳へ直
ち弟子入りをして念佛門に入りまして宗旨を替へましたるれ
から越中の國新川郡富山の極性寺の門前へ來て仁王門の前なる
石に腰を掛けて御休息をして入らせられると寺男が ○オイ其
處に居ては掃除の邪魔になるから早く他所へ往つしやい除かん
かエ 親コレ 足が痛んでならんから暫時休息をさしてくれ
○途方もねエことをいやがる早く往けと小言をいつて居る處
ろへ門から出て來ましたのが此寺の住職惠明長老でございます
之は中々名代な坊さんだ ○作三不埒なことをしては叶んアイ
ヤ某がしは當寺の住職であるが其元は雲水の僧でござるか 觀
拙僧は越後の國府に配流仰せ付つた親鸞と申すものでござる之
を聞て長老大きに驚ろさ 長作三容易ならん方たが生佛様で入

親鸞聖人御一代記

らせられるイザ此方へと聖人を寺中に引入れお待遇をいたし夜
中御説教を承たまはりました直ちに念佛門に這入つて之れ又天
台宗を改ためる時に長老の歌に
我が法は賤山かつの九十九髪
結ふも結れず解くもどかれず
何んともいへない味はひのある宗旨だといふことでございます
然し誰にでも分るのでなければ眞實の教へでない其處で聖人取
敢す
我が法は朝夕撫でし兒の髪
結ふも結はるゝ解くもどかるゝ
成程斯ういふ風でなければ眞どの宗旨ではない是から此處を立
出で同郡三日市といふ處ろへ來まして源左衛門といふ百姓の家
へ一晩お泊り遊ばして御説教を爲さいましたヌルと同所に慈田

親鸞聖人御一代記

屋といふ大家があつてうれが聖人を御招待をしてお中食を御馳
走をした其後茶を差し上げて申柿を器はにもつて差し上げる
と其の核を三ツ取つて爐にて焼き其の中央焦げたるを其の家の
庭先に埋めまして念珠を取り親今我が勤むる處の法末世に
盛んにならば此の焼きたる柿核より芽を生ずべしと仰せられし
が果して此の焦げたる柿核から芽を生じまして今も彼の地に三
本柿と申して盛んに残り居ります聖朝此處を御出立頸城郡外
波村の名主大文字屋右近が宅に入りまして一夜御説法を爲され
十字の名號を書て與へ翌朝外波村を出て小野の浦より八里の間
お船に召され赤石の岸にお着きあつて小田の濱に上り國分の萩
原年景が元にお歸り遊ばしました聖人の高德を聞てお弟子にな
つたり源氏の侍ひで佐々木三郎盛綱同じく四郎高綱兄弟諸共
弓矢をすて、聖人のお弟子となり兄三郎盛綱は法名法善と賜は

親鸞聖人御一代記

り弟四郎高綱は了智と賜はりました越前の福井眞宗寺の開基は
盛綱入道法善又信濃の國松本正行寺の開基は高綱入道了智なり
といふことでござまいす俗て親鸞聖人が御配所に於て説法をい
たしまして老若男女の善惡を問はず此の世の迷ひを夫つて安樂
の淨土に入れとお勤めなさいました然し國府寺までばかりお在
でなると弘く之を弘めることが出来せんから諸所其の邊を
お歩行になつて御説法をなさる或時蒲原彌彦の庄を御通行なさ
いますと後ろから一人の老女が参りまして老御聖人様之は茶
受けにいたしませうと存じまして拵らへましたものでございま
すが貴僧杯に献上をいたします親うれはく心を付けての施
行忝じはなく申し受けると見ますと焼栗でございませぬ之を取
上げ親鸞聖人彼の老女に向はれまして親如何に老婆彌陀本願
の利厄廣大なることを其方に見せ遣はさんと仰せられ其の栗を

親鸞聖人御一代記

地に埋めまして 親我が勤むる法後代に弘まりなば此粟再度根
をおろし芽を生せんと宣まひ如何に老婆人一度び悪事をいたし
て最早此の世にすてられた者と思ひ猶々善に入ることも能はず悪
事をいたすを生涯の身の勤めといたすものあると聞く一度び焼
きし粟なれを彌陀の利厄に依つて枝出て再たび實を結ぶことあ
らん之れと同じく人が悪事をいたしても改心だにせば如來の功
徳に依つて再たび元の善人にならんこと疑がふこと勿れと仰せ
られて其の儘此處を立出でました婆アさんは妙ナ顔をして親鸞
さまを見送つて居る處るへバラク 後ろから参りました三四人
の百姓が老婆に向ひまして ○婆アさま何をお前見て居るだ
婆今の坊さまが妾しが焼栗を遣つたら之れへ埋めて再たび芽を
出させると斯ういつて往つしつた ○馬鹿いはねエもんだ焼た
栗が芽を出して堪る譯のもんでねエ手品遣ひだつてソソナこと

親鸞聖人御一代記

は出来ねエ 婆それでも佛様の利厄で確かに芽を出さして實を
結ばせるといつて往つしつた ○坊主つまらねエ嘘を吐きやアが
るソソナことが出来て堪るもんかよしアノ坊主め一ツ困らして
やることがあるると其の男が跡からボク 尾引て参りました
○御出家さま今お前さんが彼處に焼栗を埋めて佛の力で彼の栗
が元の通りに芽をふいて實を結ぶといはつしつたが嘘じやアあ
んめへね 親何に出家たるべきものが偽ほりを申すものか例合
焼たものにもいたせ佛の功德に依つて元の通りに芽をふくに違
ひない ○夫れなら死んだものを浮ばせることを出来ませう
親出来んことはない死んだものを浮ばせるが出家の役である
○ソソナなら御出家さまお話しをしますすが私くしは是から先の鳥
屋野の百姓で勘兵衛と申します私しども宿に大黒屋といふ立
派な旅館屋があつて三年前に夫婦共熱病に取りつかれて死んで

親鸞聖人御一代記

しまい子供がありましたが之も間もなく熱病で死んで夫れから先化物が出るといつて誰も住居人が無エでがす立派な家だが空寺同様になつて居るだア何うだ御出家さま焼た粟を埋めて芽を出さしたり實を結ばしたりするのは功德には違エねエが亡者を浮ばせるから見ると小ひさな話した其の亡者を浮ばして貰ひてエもんだが何んなものでございます 親うれは何より安いことである人は末期に生を延くといつて死際が悪いと得てさういふことがあつた此方が佛法の功德に依つて浮ばして遣るうれへ案内をしろ ○それじやアござらつしやいと是から親鸞さまと蓮位坊の二人を連れて鳥屋野といふ處ろへ來ました大黒屋金兵衛といふ旅籠屋が幽霊が出るといふので住居人がない其處へ連れて來た奥の離れ座敷へ案内をして名主の定右衛門といふ者に話をしてしたから名主様も出て参りまして 定何うかハア先ア浮ばし

親鸞聖人御一代記

て貰ひてエもんでがす私しが死んだ金兵衛に金の貸がありました此處の家を引取りましたが化物が出るといふ評判が立つので住居人がございませんソコデハア私しの懐中が違ふでがすから何分お骨折をお願い申します 親よし 幽霊得脱いたすやう禱り遣はす然し定右衛門とやら病ひの爲めに死んだものが幽霊に出るといふのは笑止な譯だ何か之には原因があるだらふ 定左様でございます此の大黒屋の夫婦は日頃から邪見なもので恰度今より四年計り前のことでございまして此の在方に淵邊村といふ處ろがございまして其處に庄助に庄六といふ兄弟の百姓がございまして親成程 定うれが水論の間違ひから訴訟が起りました當所に代官邸がございましてお訴たへ申しまして一年の余も代官所へ度々出まして訴訟をいたしましたが何にしる水呑百

親鸞聖人御一代記

姓で一年余訴訟にかゝつたら身代も何も潰れてしまふてござい
ますうれを勝訴訟と極つて居るもんですから少しも蕪るかすに
遣らかすと相手の奴が悪ひ者で此の金兵衛の娘がお代官様の妾
になつて居るのが幸はひ此處の亭主を頼んで代官へ賄賂をし
まして勝べき訴訟が負となつたのでがすア庄助庄六の兄弟は
田地畑畑は許訟に費ひ果してしまひ剩つさへ負となつては居村
に歸ることが出来なない情けなないこんだ之れといふも大黒屋金兵
衛が賄賂を取次をしたからだといふので貴僧方が居る此の座敷
で腹を切つて死にやしたうれから此の方位になると妙ナ物が出
やして金兵衛夫婦が死んでしまふ間もなく代官の妾になつて居
る女も死ぬ代官様も熱病で死にましたさういふ譯でございます
から誰も此處に住居てがねエでがす何うかハ不佛様の御利厄で
二人を浮ばして貰ひてエもんでがす 親左様が所謂執念の深い

親鸞聖人御一代記

と申すものかヨッ 浮ばして遣はすと仰せられました處ろへ
精進で御膳を出す親鸞様が 親ニレ 精進には及ばん肴を
持て参れ酒もあるなら飲ひて定右衛門之を聞て勘兵衛と顔を見
合せました 定御出家さま肴を喰ふでございますか 親喰べる
が 定私しは知りませんが五戒の内坊さんは肴は喰へないとい
ふこととでございます 親左様 世間の生臭坊主は精進をい
たすううだが此方は生臭坊主でないから精進はせん 定生臭坊
主だから精進をしないといふのは妙でございます 親之を見ろと仰
せられて口を開いて歯を見せました 定へエー口の中には舌が
あつて歯がございます 親此の歯は平らのと尖つたがのと二タ
通りある何んの爲めに二タ通りあるかといふと平らのは五穀野
菜を食する爲め尖りし歯は肉を食する爲め然らば人間は肉も喰

べられ野菜も喰べられる鷹は死すとも穂は喰すといふことがあ
るが彼の鷹は人間の通りの齒でないから穂を食すことが出来ん
のだ依つて人間は何んでも喰べられるから何んでも食す一定夫
れでは御出家さま鹽餅がございますがお喰んなさいますか 親
結締く 夫れに酒も飲む 定夫れでは濁酒を持つて参りませう
之れから鹽餅で酒を持つて来るとドンく 喰べる 親時に定右衛
門

達磨さん此方向んせ世の中は

月雪花に酒と三味線

うまいことを申ししたもんだといひながらお笑ひ遊ばした之れは
嘘だ其の時分に三味線杯はありませす況んやコンナ狂歌はない
之は今に三味線も出来斯う狂歌も出来るだろふといふので親鸞
様が仰せられたのだといふが之れもあてにならない名主も驚る

けば勘兵衛も驚くコンな生臭坊主が何が出来るものかと思つて
居た其内にだんく 夜も更け渡りしましたから二人は暇を告げて
歸りました跡に親鸞様が蓮位坊の二人りにて念佛を唱へて居る
とボンと打したのが九ツ深々と更け渡る真夜中時しも秋の未つ
方裏手の方より吹込ひ夜嵐の爲に燈蓋の燈火かパツと消えまし
た途端に夫れへスルく 出て参つた二人の男真暗な座敷にあ
りく と姿が見へました時に親鸞聖人は情々と之を詠めて 親
其方共は庄助庄六と申す兄弟か ○如何にも淵邊村の百姓庄助
庄六の兄弟でございます永年の間當家に崇りを爲しまししかが今
宵は貴僧の如き清僧がお泊り遊ばされましたに付き御引導を受
け未來の佛果を得ん爲め之れへ現はれましてございます 親如
何に兄弟前世の宿業に依つて今世に於て大黒屋金兵衛の爲に敢
果なき最期を遂げるに至るは前世の悪業を晴す爲めなり未來は

親鸞聖人御一代記

必らず佛果を得ん之れ經の中に色即是空空即是色何を恨むと仰
せられ水晶の念珠を以て打ちますとバツと姿が消えました途端
に消えた燈火が元の通りに点く之は前世の業に依つて今世に於
て斯ういふ災難に逢ふ夫れを恨むは間違ひだ災難を興へた大黒
屋金兵衛は前世の業を晴してくれる佛様だと思へといふ引導で
ございませす斯う考へれば決して人を恨むことはない色は即ち
之れ空形あるものも元を糺せば空である恨みを受けても其の人
の腹の中に人を恨むといふ心は別にない空は即ち之れ色何ん
もないもの其儘即ち形ちである早くいへば隅田川は業平が千
年前に来て都鳥を見ましていざ事問はん都鳥隅田河原に宿はあ
れどもといはれました千年前の隅田川も今の隅田川も隅田川に
變りはない處で此の隅田川の本体といふものは何んなものであ
らふと段々川上へ逆のぼつて往つて考へて見たら彼方の岩の隅

親鸞聖人御一代記

からチヨロく流れる水此方の岩の間からチヨロと出て来る水
夫れが合して大きな水になつて始めて隅田川と成る其のチヨロ
は出る水の本体は何んだといつて聞らべても分りません然ら
ば何んにもない處から水が出て来て隅田川になる然らば無い
のかと思ふと千年前もあれば今もある有るかと思へば無い
かと思ふとある然らば一ツの心で恨みも出れば慈悲も出る其の
心は何んなものであらうと人間を解剖して尋ねてもコゝに心が
ありましたといふことは未だに見當らない然らば心はないかと
思ふとあるけれども元はないものだ其故恨みもなければ喜びも
ない歡々ないといふ極れば人を恨むのは馬鹿な話し心に憎ひ奴だと
いふ考への出るのはつまり霜が降つたやうなもの旭日に向へば
解けて何んにもない夫故佛様が色は即ち之れ空色といふことは
形あるものを指していふのである斯ういふと恨む形といふのは

親鸞聖人御一代記

ないといふかも知れませんが佛機の方でいふと恨むのは即ち
恨むといふ形だ借て翌日定右衛門勘兵衛に此の話をしてな
は人々の迷ひを晴さん爲めに携さへたる紫竹の杖を地に突立て
宣はく親我が勤むる處の念佛宗釋伽彌陀二尊の佛意に叶へば
即ち此の杖より枝葉を生ずべしと果して日ならず芽を生じ枝葉
逆さまに生立ちました之を越後の逆さ竹といふ後に此處に寺が
出来て鳥屋野院淨光寺といふ夫れに彌秀だ燒栗を埋めた處へも
結構な栗が出来まして三度づゝ年に實を結ぶ之を越後の三度栗
といふ今に栗林といふ處が残つて居ります之より聖人御より
られたる玉姫君に御面會いたさるといふ一席は次席に申し上げ
ます

親鸞聖人御一代記

第十席

時に親鸞聖人國府に歸り遊ばして専ら念佛を唱へ居られる
と或時のことでございましてが蓮位坊が國府の町へ買物に行く
とソツといふ騒ぎ何事が始まつたかと思ひまして人を分けて見
ると此の騒ぎは外のことでもございませぬ年頃卅二三になる善
人を後ろに圍つて四十四五になる男が長刀を抜て四五名の侍ひ
を相手に斬合つて居る蓮位坊之を見て大きに驚ろきました其の
侍ひは是れ九條様に永らくの間だ奉公をして居る山邊兵衛と
いふ者でございませぬ且は後の方控へられて居るは市女笠を
頂いて頻りに此のことに就て氣を揉んで居る婦人は確とは分ら
ないが聖人の妻玉姫様のやうである元來蓮位坊といふ人は大力
で以前武家でございませぬからツカ〜と進み出で蓮アイヤ夫

親鸞聖人御一代記

れに見へられるは山邊兵衛殿ではござらんか愚僧は蓮位坊でござる
山之れは何誰かど心得たら蓮位の御坊におはすか 蓮如
何なる仔細あつて白刃を劈し争ひをいたされる 山此度御婦人
を連れ番人の跡を慕ひ之れへ罷り越す途中此の者等御婦人に
對し不禮を加へ剩さへ酒の相手させんといふ不埒な所行俊
つて某がし勘辨相成らず之を斬てすてんの覺悟でござる 蓮夫
れは怪しからんことの出來いたしたものアイヤ夫れなるお武家
某しは當所に罷り在る蓮位坊と申すものでござるが承たまはる
處ろ何か其元等が不禮を加へ夫れが爲に斯く喧嘩に相成られた
る由拙者御仲裁申し上げる速やかに太刀をお引きなさい ○默
れ我々は當國府の代官萩原年景の家來であるが今日野駈けに參
つた歸る酒の機嫌で之れまで參ると不禮にも此奴が拙者の御
に翰當をいたした夫れを尤りて居る處に夫れなる婦人が出て顔

親鸞聖人御一代記

りに諸事をいたすから勘辨をいたして頼るに依つて我々の酒の
酌をいたせと申したのだ夫れが成らんといふから據こころなく
此奴を相手に眞劍勝負をいたす貴様は都よりの流人彼の親鸞の
門弟ならずや流人の介錯をいたす世すて人の分際として仲裁を
いたす段不埒な奴其處除け 蓮デモございませうが此の者とは
私くし年來の友何卒御勘辨に預かりたい強て酒の酌御所望どあ
れば婦人になり替り私くしがいたしませう ○だまれ貴様のや
うな不潔なる坊主が酌をして何んになる下れ 蓮愈々御勘辨相
成らざれば拙僧が御相手をいたす ○已れ不埒なことをいふ奴
だアア除んければ斯うして除してやると一人前から斬込み來る
をヒラリと膝を變はしまして佛の折檻覺めて居るといふより早
く拳を堅めて其奴の横面をばり倒した何にしる禁裡北面の侍ひ
で戦さもして來た坊さんだから中々腕力は勝れたもの今一人魚

親鸞聖人御一代記

つて斬り込み来る一刀物々しやと跡を變はし利腕を取つて五六
間向ふへ投げつける今一名打込み来るを足上げて蹴飛ばした跡
の二人はコハ敵はしと逃げやうとするのを山邊兵衛圍り込んで
胸打ちでたゝき倒しました五人とも助け玉ひと頻りに手を合は
して拜んで居ります速位坊莞爾笑ひ 速何うだ恐れ入つたか只
の坊主だと思ふと逃ふる汝等のやうな邊土に育ち百姓一擧に等
しき戦かひをした者と此方とは同一にはならん今でこそ出家に
いたして居るが都に於て屢々戦かひをいたし慈悲忽辱の衣を纏
ひ居るが以前は緋緘の鎧に水晶の念珠を持つ手に弓矢を携へた
こともある命ちは助けやるから歸れ五人の侍ひ道々の体で退
散いたしました大勢の見物が驚ろひて ○何んと大層な坊さん
じやアないか只の人じやアねニ義経様の御家來に辨慶といふ強
ひ坊さんがあると聞たが辨慶より此の人の方が強さうだと名々

親鸞聖人御一代記

驚いて居ります時に速位坊は山邊兵衛に向ひまして 蓮夫れに
れはするは聖人の御内室玉姫君にはましまさずや如何して雲井
迄かの越路へ参られたかと尋ねられた時に山邊兵衛が 山され
ば此度聖人當所に御流刑と聞き夫婦は二世の縁やらいふ故一日
も早く御傍に参り幾未永く御苦勞を慰さめ奉まつらんとと思召
しに付某がし御供を仕まつり是迄罷り越してござる 蓮僧も有
難き思召しにございます聖人承たまはりなば嘸ふかし喜ぶこと
でござるウイザ速位御案内を仕まつると此の二人を連れまして
國府寺の南當時親鸞聖人の居らせられる御小屋に連れて参りま
した玉姫様は玉を枕とし桂をかし咲榮耀榮華を遊ばした尊とい
お方の御姫君と生れ何に一ッ浮世の不自由を感じられんお身の
上で之れへ参られまして聖人のお姿を見上げると最も哀れに瘦
せ衰るへ誠とに見るかげもない零落ハツとばかりに涙にくれ暫

親鸞聖人御一代記

時はお顔も上げませなんだ兵衛より委細のことを申し上げたに
依つて聖人涙にくれさせられ親此度び予が越路に配流申し付
つたも佛説でいふ過去の因縁決して歎くには足らん其方が遠路
も厭はずはるゝ當所に罷り越し予に仕へんどの心底喜こばし
きことである夫れにつけても兵衛永らくの道中無かしつらさこ
とにてありつらん先づゆるゝ當所に足を止りると仰せられま
したコゝで久方ぶり御夫婦御面會を遊ばしませして先づ喜こばし
きことでありませ一説に玉姫様は都に於て御近去遊ばし御墳墓
も立派に造つて居るといふことでございませが南鶴は斯う聞き
ましから此の通りお話しをいたしませす借て蓮位坊と兵衛の爲に
大勢の人の前で辱かしめられた五人の者は如何にも残念何うか
一番此の仕返しをしてやらふと其夜九ツ時分に得物ゝを携さ
へ五人の者が國府寺の表門から通入ふとすると門の左右に立て

親鸞聖人御一代記

居る仁王の像片々の仁王様が仁コレ貴様達は何處へ参ると申
しました五人の者之を聞て正かに木で拵らへた仁王がソッナこ
どをいふ譯がないと思ひ〇オイ誰だ貴様達は何處へ往くとは
何んだ〇誰もソッナことをいつたものはない〇ソッデモ拙
者の耳にはさう聞へた〇何んでも此の仁王がいつたやうに思
ふが何うだらふ〇馬鹿をいへ木で拵らへた仁王が口を聞く奴
があるか〇然し仁主らしひ一ツ聞て見やうではないかど一人
ツカ〜と其處へ参りまして〇ヤイ仁王何か申したか仁ッ
ン貴様達は何處へ参るといつた〇何んだ此奴化物だ吾々は親
鸞といふ坊主の處へ参つて先刻耻辱を與へられた仕返しをいた
すつもりだ仁夫れはならん汝等が悪ひ爲に耻辱を受けたは自業
自得然るに人を恨むといふ法があるか速やかに立歸れさもない
と此方が只はねかんぞ〇已れ何者が化けて仁王になつたか生

記代一御人聖鸞親

躰を見届けくれんと一人ヒラリ引抜た一刀バツと斬り付けて來
るのを右の腕を延ばして彼の仁王其奴の利腕を取りバツと投げ
ると十五六間先の沼の中へ投げ込んだ今一人朋友の仇と斬り込
むのを引ばづして首筋を押へギリと引つ立てバツと投げる
と三丈五六尺の上の山門の屋根の上に投げ上げられた跡の三人
之れはと驚ろくをバラと出た仁王が三人を一時に左りの脇
に抱へ込んでノソリと萩原年景の邸に参りました門をヒラ
ツと跨ひで玄關へ來り左りの足を上げてトンと戸を叩くとバラ
ツと外れる身躰を屈めながら唐紙を開きノソリと奥に遁入
つて参りました何にしる仁王さまが歩行くのだからソロソロ歩
行てもズンメンメリと音がする年景目を覺して地震かと思ふ
と仁王がノソリと遺つて來た仁コレ年景起る俺だ貴様と
は馴染の仁王だ年景目を覺して見ると例の仁王さまでございま

記代一御人聖鸞親

す年金剛神能くれ出なすつた仁あまり能くも來ない然々な
譯で今霄は此奴等五人打揃ひ盡の喧嘩の仕返しに往ふといふの
を此方が取て押へて参つた以後ケ櫓のこのない機能く意見を
いたして遣れ三人を引渡すと夫れへ三人投げ出すと仁王様の方
らで抱へられたのだから三人目を廻はして居る年コレは死ん
で居ります仁死にはいたさん目を廻して居るのだヤツといふ
と背中を一ツツツと叩くと三人氣が付た仁氣が付たか○恐
れ入りました仁以後改心をいたして不埒な所行を働くな何う
だ○是れからは改心を仕まつります平に御勘辨を……年誠
に相濟まんことと拙者よりもお詫言をいたします仁跡の二人
は一人は沼の中一人は山門の屋根の上ト助けるに不自由であ
らふが其つもりで早く手當をしてやれ又來るぞとノソリ仁王
は立歸りました跡に萩原年景驚ろひて夜中ながら山門へ來て見

親鸞聖人御一代記

るど屋根の上へ投り上げられた家來一人ブルく慄へて居る驚
ろひて之れから三間梯子を持つて來たが中々屈かない幾個もつ
なひで漸々下へれるす内に沼の中から一人引出したサア親鸞
まに濟まないから五人の者を坊主にして翌日説法をする親鸞
人氣の毒に考がへまして今度自分の弟子蓮位坊を百日の間だ頭
を削せないコレ返禮をした妙ナもので髮の毛のゐる方は髮を
剃落し坊主になつて説法をする坊主の方は坊主になりやうがな
いから髮を延ばして説法をする眞に世の中は變ナもんでござい
ます偕て親鸞聖人配所に於て彼方此方へ参り説法をする内或る
貧家の老女紐かけましたる布を切て之へ御名號を願ひ度と申し
まし時に南無阿彌陀佛の六字を認みめて遣はしました之は越後
蒲原郡保田孝順寺に寶物として残つて居ります又同郡白河の庄
小島村の百姓何某が家に御中食の時何がな清淨なるもので御膳

親鸞聖人御一代記

をさし上げんといふので鹽梅を菜とし松の枝を削つて箸として
さし上げた聖人喜こび遊ばし御飯濟んだ後に彼の箸を地に衝き
さし鹽梅の種を地に埋め玉ひて今我が宗門末世に盛んになるな
らば此の箸より芽を生じ八葉の松となり梅の木も榮ゑて花房八
ッに咲き八ッの實を結ぶべしといはれました果して后年松は八
葉の縁を現はし梅は花一輪に入ッづ、實を結びまして味はひは
少し鹽辛ひ人々驚ろき入り之を后年八ッ房の梅といひ越後七不
思議の一ッに數へられました然るに都に於て比叡山と奈良に眞
々不思議なことがあり親鸞聖人を憎んだ坊主もが却つて歎願
をいたしまして流罪御免を願ふといふいふ親鸞聖人越路よ
り再び都にお歸り遊ばすといふ是より如何なる物語がござい
ますか鳥渡休息をして……

記代一御人聖鸞親

第十一席

引續きまして真宗の開祖親鸞上人の御傳記でございます或人の
 申しまするには釋迦の弘めた宗門には之が嘘だといふ宗旨はな
 い然らば真宗とは妙な宗旨であると申されましが夫れは一を
 知つて二を知らぬことでありませぬ教への中には小乗に大乘とい
 ふ二ツの區別がある小乗とは物の道理も穢に知らぬ人に教へ
 るので地獄極樂なるの説をいふて善に導くといふ之を方便の教
 といふ大乘とは凡ての道理を説いて成程と聞人が感心する教へで
 あつて日本に涉つてゐる経の中は皆此の大乘でございます然
 して佛の道に別入るにはいろ／＼のお經の文句を考へ悟りを
 開くのが肝心ですけれども何分世渡に追れて朝夕我が先祖をま
 つつた佛壇へも線香を上げないこともあるくらゐ急忙いから中

記代一御人聖鸞親

々お經を讀んで其義理を考へてゐる暇はない……といつて學ば
 なければ迷ひが解ぬ尤も佛様の方ではいそがしいので學ぶこ
 とが出来ないなうといふソナ奴は此の宗旨に道入などいふの
 だが夫ではあまり氣の毒だから阿彌陀様が學ばんでも只有難ひ
 とお念佛を唱へれば成佛してやるといふ誠とに有難ひ教へを
 たれてくださりました之を門徒即ち真宗といふ此社會に學文
 中何が廣ひ學だといふと佛教くらの廣ひ學文はございません當
 今はヤツといふとキリストといふ人の説た教へが大分流行まし
 て全國に百万人の信者があるといふことですがアレはチヨイと
 道入りやすい教へだから我々のやうな無智なものばかりキリス
 信心いたします佛の教へは廣大で中々チヨイとは分解ないから
 教へる坊主の方も宜解分やうに説く手數もかゝるし口數もかゝ
 るから例の方便で惡ひことをすると地獄へ落ちて鬼の爲に荷賣ら

親鸞聖人御一代記

れる善根をすと極樂へ行つて佛さまになれるといふコイツは
一番手敷がかゝらなひで早く分解……然し三年たてば赤ン坊も
三ツになるといふたとへの通り鳥や獸物とは違ひまして人間と
いふものは段々進歩をするものだ夫れが証據には千年前の燕の
巢も今の燕の巢も土で造つてあつて少しもかはらないソコへくると人間は
とたくみのやうだが昔しも今もかはらないソコへくると人間は
大層なもので昔しは穴居といつて穴に住居で居りました夫れが進
歩して木で家を造るやうになる夫れが進んで塗屋になり夫れが
進んで石造煉瓦になるモ一五百年も経たらダイヤモンドと珊瑚
珠で家を作るやうになりませうコゝいふ風に進んで行くから中
々地獄極樂の説ぐらゐれば今は小兒でも承知をしない何卒是か
ら先の坊さん方は我々のやうな馬鹿なものにも能わかるやうに
佛の説たことを講釋して迷ひをばらして貰ひたい牛で酒を飲で

親鸞聖人御一代記

相撲甚句も唄つて女に擲擲ばかりが坊さんの勤めではあるまい
俗親慈聖人は越後の國府に居られまして教へをたれて居りまし
たが代官の萩原年景の願ひで何うかお説教をして貰ひ度といふ
處から國分寺といふ寺に於てお説教といふことになつた元來評
判のいふ聖人でもございませうから非常の聞人である實つに客止と
いふ好景氣でありました本尊の前には演壇をもうけまして晝の四
ツ時から始まりました最前に逓位坊といふものが現はれまして
佛の光りといふ題で説教いたしました先づ之は前座でございま
すいふことはたしかであるが何分以前が軍人であるから號令を
かけるとは妙である。○甚座もアノ坊さんは妙でねへか佛の
光りとは何たる。○大方ア五光の事だんべエ。○さうかね
エ五光の講釋だんべエか……なんうわさをして居て之は能くわ
からなかつた其跡へ親鸞聖人があらわれまして聖人は人の目的

といふ題であります水晶の念珠を持まして最初に南無阿彌陀佛
々々々唱へ咳一咳して 親借て參詣の方々愚僧の演ますは人の
目的といふことでござります御同様に此世の中に人と生を得た
る上は何が爲に生てゐるかといふ目的を考へなければなりません
ん貴下方は何が目的でありますかと
參詣人は互ひに顔を見合せました ○人間の目當ちうコゝだが
あんだろう ○甚麼もわかんねエナ 親借て皆の衆人は手をあ
げるにも足をあげるにも目當がなければいたしません人は萬物
の長として生ある物處ろではない此世の中に有とあらゆる物の
中で人ぐらゐ尊とひものはございません其尊ひものであるから
猶更目當なくして生てゐる譯はござりません目當なくして働ら
くものは愚でなければ狂氣である最とも譬若經の中に以無所得
と説れて目當なく稼げ目當なく働らけといふが之は中凡人に

は出來ないことである借萬物の長たる人が人としての目的を知
ることもなく又知らんもしないのは實に驚ろき入る外はござ
りません又此位な智慧のない話しはなかるうと思ひます參詣の
方々よく考へて御覽なさい貴下方は能喰又よく能飲む其生て
ゐる目的は何であるか喰る爲に生てゐるのでありますか生てゐ
る爲にたべるのでありますか凡う此の世の中に生てゐる人は實
に食ふ爲に生て居るやうであります然したる爲に生てゐるは
之れ犬や馬の如き生涯であつて氣の毒なことであります果して
喰ふ爲に生てゐるといふならば人と尊とひべき眞打は何處に
ござりますか私くしが之を考へまして人にきゝますと一人の人
の目的を以て多く集まる人間の目的と同じにしてゐるものがあ
ります人は鳥や獸物どちらがひまして只一人では何事も出來ませ
ん言葉の通じるは一人では居られない証據であります何うか皆

さん一人の目的と大勢かたまつてことをするのが人の人たる行ないであるとの此の二ツを能くわけてきいてくだされたい夫れ上に立て政事を行なひわれを安く寐かして下ださる方は何うしたら天下が泰平に治まるであらうと心配するは政事の爲に骨を折るので其身を政治する身分の目當であつて決して人の目的でございませぬ又軍人が軍のことを學ぶは軍人としての目當であつて人としての目當ではない坊主として目當であつて人としての目當ではない坊主はござりませぬ前に述べましたる如く政治をする人も軍人も坊主も世の中に立ていろくのことを執は即ち人間たる目的を達せん爲の手段の一であつて事業は目當ではござりませぬ商人がうるばんをはじき帳山を翻べ東西に奔走して金をもうけるも商人として目當でありませぬ人としての目當ではない百姓が欲を

持て田畑をたがやすは百姓としての目當であつて人としての目當ではない然らば人としての目當は何であるかといふと之にはいろくの説がござります然し最も多くの人が目を着てゐるは金を得るのが目當らしゆふござります最も人の營業をなしと起す其目當は金を得のであつて之は決して差支ではない然し其取つた金は或事柄に向つて用へる爲であつて金儲けは骨折の目當であるが人としての目當ではありませぬ然るに此世の中のもの何の業をする人でも其眼をつけるは金であつて何の目當もなく何の考がへもなく一向金に戀焦れてゐる只願ふ處は一錢でも餘計に儲けやうと思つて居ります金をもうけてからといふ仕事を起したといふ人もあるが夫は一を捨て二を取るのて取つた金は何の爲にするのでありませるかといへば積り大金持

親鸞聖人御一代記

たる譽れと其財産に依つて來たる威勢と衣食住の贅澤を去く此の世の中を送らんといふのでござりませう若し夫が本統であつたならば其人たちの目當は金にあつて其實金でありません夫は何ういふわけかといふと金の爲に生れる大金持の譽れと威勢と衣食住の贅澤と安さどにある然し其譽れは何でありませうか金を得たことゝ之をためることに妙を得た人といへる譽れであつて譽れといへで其聞へば至極うつくしいが實は客な人といふ異名でござります何と皆さん悲しひ譽れではございませんか其威勢も金の爲に出來た威勢であつて即ち金其の物の威勢で誠とに其人に威光のあるのではない貴下方がさういふ者に世話にさへならなければ少しも有難ひこととはござりませんたとへ千萬兩の金があらうとも此方には一文の價値もござりません借残る處るは贅澤と安樂の二ツである自分が骨を折て拵らへた金で贅澤

親鸞聖人御一代記

や安樂をするのは其人の自由で他から彼是といふ處はない然し夫が人の目當であるか成程幾分かの贅澤安樂は骨を折た人に社會の人が與へてもよいが只一心に金を求め自分の爲にばかり働らひた者は何でソナに威張れたり贅澤をするをだまつて見て居ませうか之は人の目當のみならず世の中の人へ對して濟ぬ理由でありませう仮に之が人間の目當としても此の世には多くの人がある中に贅澤をして安樂に暮してゐるものが果して何人ござりませう其多くは貧乏に生涯を終るものである然らば此多くの人はトテも人間の目當を達することが出來ないか又は此多くの人は少い人に贅澤と安樂とを與へる爲に生れたるかア、之何の因果であるか若し夫が誰とであつたならば寧ろ生れん方がましであらう中には名譽を得れば宜い夫が人の目的であるといふ者がござります成程一應は最ともなることであるが果して正當の

親鸞聖人御一代記

譽を得ることが出来ませうが此世の中は時々考がへちがいをして却つて不義者を慕ひ者を譽るることがあります之を今まであつたことに就て考がへますと實にエライ方や佛様のやうな方が却つて罰を受けて居る之世の中の誤まつてゐる証據である然し罪人になつたエライ方が譽れを得やうと考がへたならば矢張間違つてゐる其頃の世の中と一緒になつてゐる証據である然し罪人を得ることが出来ませんといへば必ず皆さんがイヤ我々が願ふ譽れはソシテ深たことではない眞正の譽れであつて玉の如き譽れであるといふでせう然らば誤まりのない玉の如き譽れとは何でありませうか若し前に述べた場合には則ち世中のが聞

親鸞聖人御一代記

れと誠の道とが二ツあつたときは譽れをすて、誠の道を取らなければなるまい然らば人間の目當は何であるかといふと佛の教しへを宜く守り人の徳を發し多くのものを助けるにありませう前にも述べた如く申すに此のいうがしい世界に數千のお經を見て迷ひを晴すは大變な手数であるから南無阿彌陀佛と唱へれば彌陀の淨土に往生いたし此世の中の苦勞も失人としての目當も立派に立てありますと親鸞聖人が尊とき御聲にて申されました此の時

親鸞聖人御一代記

ますと此の中に一人坊主が居りまして坊アイヤ夫れなる聖人は佛と菩薩に如何なる區別がござるか承たまはりたい親左様佛は無上正真道を得たものが佛であつて菩薩といふことは其の次に位をするものである坊然らば今一ツお問ひ申さん磐若とは如何なるものでござる親磐若とは智慧といふことでござる坊拙僧は禪家の僧であるが少しくお尋ね申したいは磐若經の中に初筆に摩訶般若波羅密多心經とあるが如何なることでござると問ひを掛けた之れは中々六ヶ敷ことを大乘の悟りてございませ前にも申し上げましたる通り小乗とは方便の教へ大乘は眞空の悟り中々六ヶ敷もんでございます此の磐若經といふものは僅かに文字が二百六十二しかないうれで佛様の教へが残らず書てある天台宗でも浄土宗でも眞言でも律でも禪家でも何に宗旨でも磐若經を讀んことはない又坊さんでなくても在家でも磐若經

親鸞聖人御一代記

は讀みますすうれだから之を聞た百姓が〇之は面白い俺たちが平常讀んで居るお經の問答だ何んなことをいふかと聞いて居ります時に親鸞聖人お笑ひ遊ばして之は別に深き意味があるといふことでござらん摩訶般若波羅密多といふ八字は梵語即ち印度の原語であつて跡の心經といふ二字は漢語である佛のことを言たものの中には梵漢兼舉ると申して釋伽の出した印度の詞ばと唐土で翻譯をした漢語と二ツ一緒にして經文に据て置くといふことがござる坊何故一ツは印度の詞にして一ツは漢語にいたして置くのでございませうれを聞きたい親左様之は五種不翻と申して五通りの詞に限つて原語の儘に据て置くといふのが規則である其の五通りといふは第一は秘密の故に譯せず所謂眞言秘密の陀羅尼なるといふは此の類でござる第二は一ツの文字について澤山の義理を含み居る故譯せずとした第三は土地にな

いもの、詞は譯せない第四は古風を存する爲め譯さん第五に譯
さぬ方に利益が多いと認められた故に漢字で翻譯をせん既に摩
河とは三ツの義を含んで居る大と多と勝と三通りの意味が此の
摩河といふ字にある大とすれば多と勝が缺る勝とすれば大と多
どかけるそれ故に翻譯をせん方がよいと摩河と扱たものである
波羅密多といふのは到彼岸といふことになる磐若といふことは
佛様の悟りを開いた智慧といふことである然し此の智慧は世間
に行なはれて居る智慧とは違ひますから只智慧と翻譯をしては
間違ひが起る又波羅密多の到彼岸も唯到彼岸といふ漢語のまゝ
にするると河や溝渠を越して向ふの岸に往くのも到彼岸である然
るに今波羅密多といふ到彼岸は濟度といふ意味で吾々の様な凡
夫がさまゝの煩悩妄想の苦しみの海に溺れて居るを彼の磐若
の智慧の船に乗つて向ふ岸の安樂の悟り境界にいたらせるとい

ふ例への意味で名付けたのであるから只サラと譯した分
は面白くないケ欄な意味で名付けたのであるから磐若波羅密多
は如何にも其の體廣大にして其の用は多く其の徳甚はだ勝れた
もので即ち摩河の三の義を含んで居るに依つて摩河磐若波羅
密多と申したのである次に心經の心の字は梵語で心の字に當る
詞が三通りある其の中で今此の經の心の字はカリダといふ印度
の詞で肉團心といふことである今でいふと腦髓といふことであ
る吾々の身体に大切なるものは腦である然らば諸々の教への中で
之が一番大切であるといふのでございます次にお經の經の字は
印度の詞でソクタンといひ之を譯すと貫線といふことになる貫
線とは糸で物を貫ぬきとめる意味で詞と文字の上に多くの道理
を貫ぬきとめるたとへであります然るに唐土では衆人の書きた
書物を經と申します夫故に經と名付けたものである既に儒道の

方で四經とか書經とかいふ字と何にも違ひはないので正なり常
なり經なりなると經を申してあると同じこと其處で摩河磐若波
羅密多心經といふことを残らず纏めて早はかりのするやうにい
ふと大きく多く勝れたる智慧にて苦しみの海を渡り安樂なる悟
りの岸に參る肝心なることを聖人が説き示されたといふ意味に
なる分りましたかといつた時に尋ねた坊さんが感心をして口を
閉てしまつたヌルと百姓が ○「お聖人様に伺がひます觀音さま
といふことはアレは何んといふことでございませう 親觀音と
いふものはないアレは觀自在といふことであるうれば觀自在とい
ふことだ天地にあらゆるものを自由自在に見るといふことであ
る ○「菩薩といふのは何んがす 親「アレは本來菩提薩埵摩河
薩埵といふべきを遂には略して菩薩といふのである ○「成程永
いこんでがすナ觀音様といふと鳥渡いへますが南無菩提摩河薩

埵といふと三度唱へれば日の短けエ時分には日が暮れます 親
イヤ佛を信心をするのに時間を恐がつては叶ん ○「さうですか
親智慧の船に乗つて安樂の淨土に到るのが佛の教へである ○
けれどももれ聖人様余り長くいつて居ると其の船に乗りおくれま
す……熱氣だと思つて居る ○「菩提とは何んといふことでござ
います 親「菩提は悟りといふことだ薩埵といふことは有情とか
衆生とかいふことで人と考がへるが一番早い摩河は前に話した
通り大きく多く勝れるで平たくいふと佛の悟りを開くことを求
むる人で徳の多い勝れた大人といふことになるよ説き聞せたる
處へ馬に鞭をあて、一人の侍ひ此の處に駈け付け來り親鸞聖人
に向つて何やうのことをいふか虚か實か鳥渡一と思いたしまし
て申し上げます

親鸞聖人御一代記

第十二席

此の使は聖人勅免の御使ひでございませす如何して親鸞聖人が御免になつたと申しませす申し上げるまでもなく別に悪ひことをしたお方でもなく結局多くの人を助けやうといふので浄土真宗を弘めたのが他の坊主の嫉む處るとなり法然上人は讃岐に流罪親鸞聖人は越後に流刑に處せられたました親鸞聖人の奥方玉姫君御父上は九條關白兼實公で之を月の輪殿下と稱し奉まつる近頃兼實公御病氣であらせられて御子息の藤の中納言光親卿に法然上人と親鸞聖人の二名一日も早く放免に相成るやう勸慰を慰さめ奉まつれと御遺言をして御逝去になりました光親卿は父上の御遺言もあり旁々法然上人親鸞聖人の非凡なることを思召して天子様へ御免に相成るやう願ひましたがお免しもございませな

親鸞聖人御一代記

んだ所が此所に不思議なことが出来たのは承元四年七月二日比叡山の麓の坂本といふ所からツツといふ聲が聞へて日の暮合山に押して来る者がある比叡山の坊主何事かと思ひまして大勢立出で見ると大層な人が麓から押して来るやうである ○何んたらふ ○大勢人が来るやうだ近頃都は血なまぐさいがことによつたら戦さでも始めつたのだらふりれ支度をしろと其時分の叡山の坊主といふと強ひもので名々坊主即ち鉢巻をして薙刀を携さへまたは刀を持ちサア来いと待つて居ると其の人聲とも覺しきものがバタツとやんで音沙汰もございません ○何んだらふ不思議なことがあるものだ之れ西念貫様に鎮念の二人は此の中堂に見張をして居て怪しひ者が来たら此の太鼓を打て山に知らせろ平家の余類か源氏の謀叛人か知らんが見つけ次第太鼓を叩けといひつけて他の坊主は引取つてしまふ西念に鎮念の二

親鸞聖人御一代記

人が何んだか山が騒がしひから中堂に見張をして居ります中
堂には四十八の燈明が点て居ると夜の四ツ半今にも入ッといふ
頃ワツといふ聲かきこゑたうれ来たたと名々魔を見て居る所へ
押して来たのが五六十疋の猿だドン山へ登つて来る西念坊
に鎮念坊の二人が西イヤア猿が来た何んだつて今頃猿が數
十疋来たらふ不思議だナといふ所へバラク乗り込んで
来ました猿が突然齒をむき出すと西念坊に鎮念坊の二人をどつ
捕まへては倒したイヤ驚ろひた二人之は堪らないと逃げ出さ
うといふのをつかまへて彼等のノめて居る丸ぐけで傍の松の木
へ縋り付けたりれから大勢の猿が顔をムンツたり手足をむしる
二人は一寸だめし五分だめしといふは刀で斬ることであるが之
は一寸むしり五分むしり切れものど違つて爪で引かくのである
から痛ひこと堪らないソツといふ位聲其の内に五六十疋の猿が

親鸞聖人御一代記

中堂へ躍り込ひと手分けをしてお供物をムンヤク喰ひ四十八
の燈明を消した上四抱へもあらふといふ大太鼓大きな撥でドン
くと叩いてワツと鯨波の聲をつくり坂本をさして下つてしま
つた他の坊主はそれ太鼓が鳴つたと一同騒げ付けて来て見ると
中堂の燈明を消して真暗うれに向ふの方を詠めると西念坊に鎮念
坊が縋られて居るうれを解て見ると顔中血だらけ〇ヤイ二人
何うした怪俄をしたか借は一揆が起つて之へ押して来たど見へ
る貴機の疵は刀疵か矢疵か二人爪疵でござる〇何んだ爪疵だ
爪疵とは何ういふ疵だ借は組打をして疵を受けたか二人組打を
する間はないので何疋もくも押して来て一時に取押へられま
した〇全体敵手は何んだ二人猿でござる〇何に猿だ猿の爲
に斯く人間が怪俄をするといふは意久地のない奴である〇意
久地があつてもなくても仕方ござらん五六十疋押し来りまし

記代一御人聖鸞親

た吾々を縛つて中堂の燈明を消し太鼓を叩ひて引上げました
○うれは不思議だ ○中にも猿の中の大将とも思しき奴金小質
緋越の錠に桃なりの兜を頂ださかゝれ進めと下知を傳へました
○嘘をつけ何んば猿でも桃なりの兜はつけまい何にしる不思議
である二人に手當をして下げました是から見張をつけて置た
が翌晩の十二時頃又々猿が二三百疋押し来て今度は文珠菩薩
の像を引倒し想持院の十二の燈明を消し障子襖を打ち破し鐘撞
堂に上つてゴン／＼早鏡をつく未だうれにも飽足らず坊々
谷々八方へ參つて暴れはうだいな暴れて夜の明方に引上げた實に
前代未聞の騒動でございますア茲に於て坊さんたちが一同集
まつて何うしたものだらうと相談をするると比叡山の南谷といふ
所に居た注記といふ坊さんが進んでいふのに注如何に方々
抑うも當山は開祖軌信和尚此の方十六代々様な先例は傳へ聞き

記代一御人聖鸞親

ません定めし當山を守護なす山王のおん神の御心に叶はざるこ
とがある故でござらふ速やかに伺ひをたてられてよろしからふ
といはれて最とも人々は之れを賛成しソコデ七月の六日北谷と
いふ所に居る稚兒で辰王といふ十三になるものに御幣を持せ
山王の社楹の上に乘せ廻りを大勢の坊主が取りまいてお經を唱
へて伺がひをたてた是は只今でもいたしますこと御幣を持つ
て居るものに神様がのりうつり其者の口をかりて何事か申すの
でございます所が此の辰王平氣な顔をして四邊を詠め袂から
饅頭を出してうれを喰べてニコ／＼笑ひ辰イヤー皆んナ何か
いつて居らア私くしを此の床に乗せてござうするのだニ ○黙つ
て居るれ前に神様がのりうつるのだ 辰「なんだ私くしに神様が
のりうつるぞんなものか来るのだ ○黙つて居ると申すになに
を喰べて居るのだ 辰昨日貰つて饅頭を喰べて居るんだ ○う

記代一御人聖鸞親

ん大行儀の悪ひ神様が有るか黙つて居ると小言をいふ五大明王の法を修しましたるが更に験しがいませぬ是れは妙だ辰王は神のお心に叶はんかと人々噂さをして居る所へバラ／＼と大勢の人を押し分け乗り込み來つた一人の小童突然辰王の御髮を搔擗んで向ふへ投げ出し社檀の大床にすつくりと立上つた人々何者ならんと見ると北谷の性持房法印の弟子で菊壽といふ九ツになる子でございます大勢の坊主之を見て大ひに力を得たされるばかりに珠數をもんで ○此の程山王の猿の悪事只事とは覺ぬ候はず定めし神慮の思召す旨候か早速示し玉へと唱へますと此の小兒がさめ／＼と泣き出しました人々鳴をしづめ何事をいふかと聞て居ると

れのが爲めなにを愛宕の山なれば
佛号を唱ふる人を流すや

記代一御人聖鸞親

と申し 菊吾は之れ五百塵點久成の如來和光の化儀を海水にやどし三千世界の能化の主なり年久しく叡山の佛法を守護す然るに此度尊とさ聖りを汝等の心得違ひより遠國へ流す段不屈至極といひも終らず

法の爲め御影をうつす山もどに
聖さへはすまじとぞ思ふ

と唱へさめ／＼と涙だにくれて居ります聞くと人々一同奇異の思ひをなし且は身震ひをして驚ろき入りました之は法然上人と親鸞聖人を流罪にさした恨みを述べたのであります ○神慮を伺がひ奉まつり恐れ入り候早々奏問を遂げて彼等二人を召し歸へします間だ以前の如く我が山を守らせ玉へと祈念をして一同に平伏をすると彼の菊壽といふ小童はバツタリ前へ倒れまして生氣を失なつてしまいました是れから菊壽には手當をいたしたま

記代一御人聖鸞親

して引取らせりソコデ同日彼の人々勅免之れある様一山舉つて奏曲を遂げました折柄不思議なのは奈良の興福寺に春日山の鹿が集まつて参りまして福興寺を始しめ八方の寺々を打ち破し始められた坊主大さに驚ろき春日明神の神殿に於て神樂を奏し御神慮を伺がつたる處ろ中坐になつた巫女が口を開いて曰く巫吾は之れ平鳥大悲如来なる濁世末代の導師なれば借りに神と相成り汝等に告げん此の頃絶へて濟度の船を失なひ利益の棹を流したり急ぎ尋ね求めて元の如くいたせと呼はりました人々大に驚ろき借は念佛宗門の僧たちを強訴して流刑せしめたること衆に驚ろき脊さたりと覺ゆ急ぎ都に登りて流罪御免の儀を願はん

記代一御人聖鸞親

處ろにあらす専ら僧徒の強訴に依つてこと此に至る今度比最勝四天王院の供養のことあるに任せ大執行なはるといふ御沙汰をございませす直ちに勅免の繪旨を下され勅使は和泉の判官阿部近本同年八月二日都を發足あつて讃岐の國へ赴ひかれました之は法然上人御赦免の爲めでございませす本來法然上人は士佐の國の幡といふ處ろへ流されるでありませすがうれを九條關白公が憐れに思召して諸岐の國中の郡は御自分の領地であるからそれへお遣はしになりませしたソコデ阿部の近本が参りまして申し渡しました其の勅書に曰く

大政官府土佐國流人藤井元彦
件人承元元年二月二十八日依罪科流刑彼國有所懷召遷矣
但宜居住畿外洛中之往還不可叶者國宜承知之依宜當行此
符到奉行

親鸞聖人御一代記

同十八日勅使は讃岐に到着し法然上人に之を申し聞け同廿九日
勅使は京に立歸りました九月廿五日上人讃岐を發駕あつて十月
四日攝州兵庫に着れました同十日に勝尾寺に入らせられ三ケ日
の間はお籠りをなされました承元五年の春を迎へる此の年改元
あつて建暦となる國中の坊主どもの願ひに依つて念佛宗の極意
を説教をなさいましたたけれども勅書にもある通り京都に遣入る
ことが出来ませんから之れへしばらくの間はお住居でございま
した其後機中納言藤原の光親卿に命せられ重ねて宣旨を下され
る其のお告文に曰く
左辨官下土佐國當召返流人
藤井元彦男の
右件元彦去承元元年三月日配流土佐國然今有所念行依之召
返者某受勅宣宣承知依宣行之

親鸞聖人御一代記

斯くの如きの御沙汰でございますから法然上人の源空は勝尾寺
を御出立あつて建暦元年十一月廿日に都に遣入られましたお住
居は東山吉水の御禪房でございます先の大僧正慈圓即ち慈鎮
和尚勅命に依つて上人の遣入るべき處ろを出來て置きましたいよ
く今日が法然上人都へ参られると聞へましたので山崎赤河原
鳥羽邊りまで出向ふ人々其數を知れず思ひ／＼にお向ひいたし
ました上人は輿車から願ひ落つる計り一同うれに取りついでお
十念を頂ださした七條を東へお通りあるに貴人武士一同老若
男女がお輿の周圍に取りつき喜こびの涙だを流し東山のお住居
まで更に寸地も余さなかつたさうでございます同十二月六日御

建暦元年八月 日

左大史小槻宿禰國實
機中納言藤原光親

親鸞聖人御一代記

代あつて天機を伺がひ奉まつり御禮を申し上げました既に其
年も暮れて建暦二年の正月上旬法然上人御心地常ならず同廿五
日の午の正刻御年八十にして大往生でございます之は親鸞さま
お師匠さんであるから鳥渡申し上げて置きませす借て此方は親鸞
聖人建暦元年十一月十七日祖師聖人の流罪御赦免といふことで
勅使は岡崎中納言範光卿宣旨を承たまはつて越後の國に下向し
給ふ此の岡崎中納言と申しますは大職寇鎌足公十七代の後裔式
部少輔從三位範兼卿の息男從二位中納言範光卿と申し奉まつる
御逝去の後左大臣從一位を贈られました同十二月二日越後の國
頸城郡なる聖人御配所に至つて此のことを告げる御説教の濟ん
だ處ろへ此の勅使でございます思はず人々喜こびの聲を上げ
るしばし鳴も止まず直ちに聖人御受け文を認ため勅答に及ばれ
ました範光卿都に歸つた後に之をさし上げると其の受文の後ろ

親鸞聖人御一代記

に愚禿といふ二字が認ためてございます之は髪を長く生して臨
しんで居られたといふ意味でございませうだん／＼都に人を遣
つて様子を見せると法然上人は十一日下旬に御入落といふこと
でございませす親鸞聖人一日も早く法然上人に御對面あり度思召
した何が何分にも越路の雪が深く人跡も絶へて居りまして御通行
が心に任せません折りしも御不快でございまして上洛の御沙汰
も御遠引に相成りましてソコ先づ性信坊といふ者に奥方の玉
姫様を付けて密かに都に送られました何にしろ永らくの間色々
聖人の爲に御厄介になつて居る多くの男女が分れを惜んで止
め申し上げる既に其年も暮れて建暦二年聖人御年四十正月の廿八
日漸やく連日の雪も晴れて旅人の足跡も多くなつたと聞き一日
も早く此の上は都へ上つて法然上人に御對面をしやうといふの
で御不快を忍び越後の國府を御出立でございます時に國府の代

親鸞聖人御一代記

官萩原年景聖人に向つて申しまするには 萩北國街道雪深くし
て御奉行お困難でございませう依て關東に出で然してお上りお
宜しむございませう 親最もものことであると仰せられ年景には
れ遺物として絹へ六字の名号を書てお遣はしになりました是よ
り古多の濱までお立出になり暫らく此處に御休息ございませ
たが此の地は國府から七八町離れた處で横巾二三町計りの海邊
でございませう古多明神の社がございませう實に北國中有名の景
色のよい處です前には漫々たる海を控へ遙かに望めば白雪日
に映じて銀砂をさらすに似たり此の越後といふ國は越中の國境
から出羽の國境まで七十五里の間だ大方濱道でございませう
より聖人は往下の橋を渡らせ玉ひ東山道にかゝられました此の
橋を往下の橋といふ越後より信濃へ往き下るの意味で名付けた
のでございませう下は谷川でございませう常には水は淺いが冬

親鸞聖人御一代記

から初春にかけると雪をけで水重さが増つて流れが急でござい
ます殊に橋の上は水が滑らかたで歩行のに誠とに困難である總
て道は近ふございませうが險しひ處ろで殊に道幅狭く一のに之を
逢ふ岐の橋ともいふ又此の街道をトザマ越とも谷通りとも申し
ます之を越して信濃に参られそれより上野の國へ道入られまし
たスルと恰度四辻といふ處ろへ来た向ふからバタ急ぎ足
に來るものがございませう見ると法然上人のお弟子で智妙坊とい
ふ者でございませう親鸞聖人目早く之を見つけたして 親うれへ
参るは智妙ではないかと聲を懸けられ見ると善信坊の親鸞さま
でございませう 智コレは聖人にございませうか此の度御流刑御赦
免といふのを承たまは影ながら悦び申し上げました拙僧
は都に参り師匠源空に久かたぶりにて面會をいたし松井田の住
居へ立戻る途中でございませう 親其方は當時此の邊に参つて居

親鸞聖人御一代記

るか 智赤城の麓小倉山といふ處ろに罷り在ります 親シテ上
人は御變りはないか 智備は聖人は御存じないと見へますナ
親存せんとは何を存せん 智されば正月の廿五日東山吉水の御
禪房に於て正午の刻上人は大往生あらせられたました 親アツと
いふと思はすうれへ打倒れ血の涙を流してお歎きでございます
只今もつて此の處ろを皿の辻と申しますす稍あつて涙を拂ひ 親
此度都に急ぎ罷り越すも一日も早く師の上人に逢はんが爲め然
るに去月廿五日吉水の禪房に於て御遷化あらせられては最早都
に急ぎ罷り越すも餘なし再び越後へ引返へさんと仰せられた
した其のことが早くも人々に知れたから御教化に預かはんとい
ふので大勢の人が親鸞聖人を止めるんで據處ろなく四月の中旬
まで上州信州の間だに御滞在でございまして同月の下旬信州月
隠山に参りまして熊笹の名号を奪せました此の熊笹の名号と

親鸞聖人御一代記

いふは一畫づゝ熊笹の如くにして六字の名号を奪きますので之
を笹の葉と申しまして只今善光寺々中願照院の寶物となつて居
りますうれから信州の善光寺へ参つて一七日の間だお籠りをな
さいました同年七月迄は越後越中國の間だ御説教をなさいま
して御修行でありました恰度五月の中旬のことであつたが越後
の國頸城郡柿崎といふ處ろへ來られる日は正に暮んどしてう
れに五月雨のならひドン／＼雨が降つて参りました以上は最早
ふお弟子が 蓮如何に師の坊斯く雨に相成りました以上は最早
此の邊には居られませぬ向ふに大ひなる家が見えますから彼へ参
つて御休息がおよろしゆふございませう 親左様かど仰せられ
竹の小笠に雨を凌ぎ千金万金にもかへ難き尊とさ御身を麻の衣
に包まれ草鞋を召して水晶の念珠をつまぐりながら南無阿彌陀
佛と唱へて其の立派な家をさして参りましたスルと表に三十恰

親鸞聖人御一代記

好の奉公人らしひものが銀を擔ぎながら外を見居ますと聖人う
れへ進まれ親其の元は當家の御主人でござるか ○イヤ私し
や此處の作男でがす親愚僧は見られる通り修行者であるが斯
く雨と申し殊に日は暮れて甚はだ難儀をいたすがどうぞ其元よ
り主人に頼んで今宵一泊を免して貸ひ度ものだが如何でござら
ふ ○それはハア氣の毒ナこんだ頼んでやるべエがお前さま宗
旨は何だな親淨土眞宗でございます ○眞宗といふとなんだ
信州から出てござらしたかナ親イヤ愚僧は念佛宗でござい
ます ○うれでは坊主の癖に生臭物を喰つたり女房を持つこと
が出来るといふ宗旨か親左様他力本願でございます ○車力
がお祖師様か親車力ではござらん他力でござる ○なんだ
他力といふのは親阿彌陀如來の利益に依つて成佛をいたすと
申すことでござる ○それでは阿彌陀様の厄介になる宗旨だ

親鸞聖人御一代記

んでも此頃國府といふ處ろへ都から妙ナ坊主が來ているんな
秋をするといふ話したがお前か親左様でござる ○それは氣
の毒なコンだが駄目だ俺の旦那さまは小幡左衛門様と仰つしや
つて此の邊で物持といはれる大盡だ禪家にこつて入らしつて中
々念佛杯を持つて往つたつて受けつけねエ氣の毒だが他へ往つ
て泊つしやい親御尤もでござるが何れの隅でもよろしひが
一夜お宿を願ひ度ものでござる ○さうかねエ何にしる旦那様
に頼んで見やう少し待つしやいと二人を待して裏手へ廻つて往
きました暫らく経つと五十計りになる立派な男が出て参りまし
て ○コレ貴様達二人は念佛の坊主か氣の毒だが今夜泊め
ること出来ないうつと出て往け親御尤もでござるが
何卒一夜御厄介になり度ふござる何れの隅でもよろしひので
ござる ○イヤ俺の家は肉を喰つたり女房を持つたりする生臭坊